

LA REVUE ORIENTA

浩

研究雜誌「ラ・レヴュー・オ・オリエンタ」

J
A
R
O
I
X
·
N
O
5
·
M
A
J
O
·
1
9
2
8

MONATA ORGANO DE JAPANA ESPERANTO-ISTITUTO

第九年

第五號

目次 (ENHAVO)

人類心の發露.....	川原次吉郎	129
TRA ESPERANTUJO		
海外消息及内地報道.....		130
アカシアの花.....	粟飯原晋	144
POR LERNANTOJ		
エスペラント初級講座.....	松本清彦	140
エスペラント中級講座.....	吉野櫻雄	142
惱しき質問〔對譯詳註〕.....	川崎直一	145
クレストマチオ質疑.....	小坂狷二	146
他山の石.....	小坂狷二	148
和文エス譯添削欄.....	編輯部	150
地球の兒等の集ひ〔滯歐日記より〕.....	小坂狷二	152
つみな集.....	小坂狷二	154
LITERATURO		
謙遜〔萩原井泉水原作エス譯〕.....	佐々城松榮	155
人間椅子〔江戸川亂歩原作エス譯〕.....	弓山重雄	156
DIVERSAJ		
會員の聲.....		160

JAPANA ESPERANTO-ISTITUTO

TOKIO, Uŝigome-ku,
Ŝin-Ogaŭa-maĉi III-14.

[Jara abono internacia 7 svisaj frankoj]

新小川町三ノ吉
東京市牛込區
法人日本エスペラント學會發行

編 輯 後 記

★先月號添付の附録はあの折疊みのまゝ開いて読み裏返へして読む様に印刷したのですが(同附録寄贈者たる福田氏の御希望により)あれを普通の16頁の折疊みのものの様に考へられて鉄で切られた方が大分あつて苦情がきまして些か恐縮しました。一言その事をこの欄へ書いておけばよかつたのですが今度残りの分は普通の體裁にして針金で綴りました。御希望の方は郵券四錢御送附下されば御送り致します。

★大會も無事にすみしました。大會記事は簡単に本誌にのせました。來月號へは大會の protokolo が附録としてでます。

★學會發賣のレコードは五月半に出來ます。價は大體一圓です。併し送料が四十錢程かゝります。詳細は追つて發表。

★學會で廣告に詳報の如く盲人のために點字書の「文法書兼小字典」を發賣することになりました。その方面の同志へ御吹聴下さい。

編 輯 部

學 會 主 催 會 話 會 の 再 生

學會主催で會話練習のため從來月二回第一第三土曜日會話練習會を開いてゐたが來會者が少くてこゝ一二ヶ月は中絶の態であつた。これを遺憾として今度多少趣をかへて學會教育部主催の下に再興することになりました。この會合は會話の練習會ですから決して會話に十分の自信がある方の會ではないので會話の練習をしたいと思はれる方々が十分に氣持よく氣安く練習のできることを主眼としてゐるのです。ですから初歩の方々も奮つて御參會下さい。

★今度は月一回として毎月第三土曜日正19時に初め30分間位各方面の専門家等(同志)を煩はしてエス語又は日本語(なるべく術語等をエス語と日本語とで話す)で興味ある講演をお願いして一は知識交換に資し、一は當日の新話題を提供し冗漫に流れやすい此種會合を引きしめる様にしたいと思ふ。

★五月から始めますから奮つて御出席下さい。(期日 五月十九日)

★會場は當分東京市麴町區丸ノ内鐵道クラブ内にて(東京驛西北永樂町市電停留所前一日活本社横、丸ノ内ホテル裏)

★會費 毎回 金十錢

學 會 主 催 エスペラント常設講習

(初等科規則變更)

★初等科(二ヶ月を一期間とし4月6月8月10月12月2月を新學期とす)

會場—東京市四谷區旭町4 二葉保育園

期日—第一月は毎週月、木兩日 午後7-8.30

第二月は毎週木曜一回 同時刻

會費—第一月は1圓。第二月は50錢。

教科書—エスペラント・ラザオ・テキスト

★中等科(隨時入會聽講可)

會場—東京市牛込區新小川町 日本エス學會

期日—毎週金曜日 午後7-9時

會費—一ヶ月50錢(15日以後入會は半額)

教科書—Z博士譯 Andersen の Fabelo II.

水曜會

{ 毎週水曜 午後正七時から輪講會をやつてゐます。今 Marta を讀み始めました。(教科書は品切ですから御出席希望の方は本をお持参下さい。) 會費無料。

東京市牛込區
新小川町3の14

財團
法人

日本エスペラント學會

振替口座
東京11325番

LA REVUE ORIENTALE

★ JARO IX, N-RO 5 ★ MONATA ORGANO DE J. E. I. ★ MAJO, 1928 ★

人類心の發露

中央大學教授 川原次吉郎

「君はまだ、相不變エスペラントをやつてゐるのか。」

こんなことを、舊い友人などに遇ふと、よく聞かされる。

「エスペラントは何も、何時までやればそれでよいといふものではない。一生涯やるよ。」私の答へはいつも同じだ。

× × ×

エスペラントをちよいと齧つてみる人は可なり多い。しかしいつまでも根氣よく續ける人は少ない。これは日本人だけでは無さうだ。ブリザア氏もどこかで、こんな意味のことを云つてゐたやうに思ふ。

けれども少數ではあるが、眞剣になつて、いつまでもいつまでもエスペラントから離れないでコツコツやつてゐる人のあるのは、何といつても心強い。種播き人は少數の熱心家で十分だ。熱し易くまた冷めやすい幾千人よりもザリザリと忍耐強い少人數の方が尊いのである。

繼續は生命なり。我徒の標語はこれでありたい。

× × ×

此頃よく思ふことだが、エスペラントを熱心にやつてゐる人には、かつて一度始めて中止したが、何かの動機でまたやり出したといふのが少なくない。はじめにちよつとでもやりかける氣持になつたのは、もうすでにその人にエスペラントとの機縁のあることを示すものだ。たとへ中絶しても、その機縁はまた後に芽をふき出すのである。かくして再度とりかかつた人は、こんごこそ非常の熱意を現はすのが常だ。このやうな人を此頃多く見受ける。

エスペラントから去る人をわれらは敢へて追はふさしない。それはやがて歸つてくるだらうと確信するからである。新らしくエスペラントへ來る人に對しても、あまり性急におしつけない。ただその人の因縁の深からんことを祈るのみだ。あせらなくともエスペラントは必ず人類中に普及されて行くにきまつて

ゐる。必要なるものが存在を主張し、擴大して行くことは、進化論の示す通りである。勝利を約束附けられたエスペラントの前途は春の海の如き感がする。

去る人もあれば、來る人もあるのが世の常だ。しかも一度は去つてもやがてまた歸るべき人だ。われらは相不變コツコツと勉強してエスペラントをヨ守つてゐればよい。

× × ×

「エスペラントをやれば、どんな得がありますか。」

こんなことを質問されることが、しばしばある。これに對する私の答へはアツサリしたものだ。

「別に得はありますまい。損得でエスペラントをやるものではありません。」

世間では、エスペラントを英語や獨逸語や佛語等の語學と同列に置いて、それをやれば何かよい資格なり利益なりを得られるやうに思つてゐる人が、案外多いやうだ。何事も巧利的に考へなければ夜も日も明けない人間の數多ある現代には、止むを得ないことかも知れないが、巧利を超越した考へももつと行はれても良くはなからうか。

今エスペラント運動に従事してゐる人は大抵は皆損ばかりしてゐる。むしろ、そんな損さか得さかいふ事を眼中に置かない連中だ。だからこそ根氣も強く續くのだと云へる。得を念頭に置く人は損すれば止めてしまふかも知れない。損得を考へないから繼續も出来るのだ。では、損をしても何をして、飽くまでエスペラントを護つて行かざるを得ないその氣持ちは一體何處から湧いて出てゐるのだらうか。

私はそれを、人類の胸の奥にひそんでゐるところの「人類心」だと云ひたい。

人類心の亡びざる限り、エスペラントは生きて行く。綠星旗を掲げて、われらは人類心の最後の勝利に向つてどつしりどつしりと進むであらう。

道 報 外 海

オーストリア

市立諸学校の講習

ウィーン市に於ては已に同國のリンツ市やグラツ市と共に外人係の警官でエスペ란トの出来る者には太字でエスペ란トと書き抜いた胸章を佩用せしめて外人客の便を圖つて居る事は既報の通りであるが、同市のエスペ란トに對する熱情は盛んなもので、市立諸學校に於けるエス語講習會は21の多數に上り605人の生徒がその講習を受けて居る。それに要する教科書やノートは市より支出しその額は總計邦貨にして約三千五百圓に上ると云ふ。

外國文化紹介の夕

同じくウィーン市に於て1月16日「ハンガリヤ文化の夕」が開催された。多數の幻燈によつて同國の風俗が紹介され歌謡や文學も實演朗讀せられた。かゝる點に於てエスペ란トの持つ効果は顯著なもので各國共にエス語によつて外國文化紹介の催が開かれて居るのは既報の通りである。2月6日には「日本の夕」が開かれ幻燈講演等によつて日本國とその文學を紹介した。次いで「瑞西の夕」や獨文學者ハウフやデンマークの畫家ドューラーの記念講演會を開く事になつて居る。云ふ迄もなくすべてエス語である。

ベルギー

萬國大會を前にして市設講習會

アントワープ市に於ては今夏第二十回萬國エスペ란ト大會が開催せられるので活潑な講習會が各所に開かれて居る。市當局主催の夜間講習會は市中の各所に開かれ商業團體のIt-Igmace やベルギー・ボーイ・スカウト等に於ても講習が始まつた。

大學エス會の設立

佛蘭西に於ける大學エス會聯盟に倣つてかブラツセル市の大學にもエスペ란ト會が設立されその發會式に際してノーベル賞金の審査員として有名なラ・フォンテーヌ氏が400人

の學生を前にして熱辯を振ひエスペ란トの爲に氣を吐いた。

ブルガリヤ

鐵道従業員の決議

ブルガリヤ鐵道従業員聯合會はその機關誌にエス語欄を設けて會員の研究に資すると共に海外同志との連絡を計り進んでは同聯合會の通信事務はすべてエス語による事に決定した。

チェツコスロヴァキヤ

日本歌謡の夕

曾て「日本の夕」を開催して異狀なる反響を収めたチェツコスロヴァキヤ國の同志 Jaroslav Süstr 氏は3月2日20時半より「日本歌謡の夕」をブラハ市のエスペ란ト俱樂部に於て開いた。會場は日章旗と綠星旗とで美しく飾られた。參會者の中には特に招待を受けて快く列席された日本公使永田氏夫妻があつて當夜の一異彩であつた。式はエス語讃歌と君ケ代とに始まり次いで永田公使の祝辭あり、續いて當夜の計劃者 Süstr 氏の登壇となつたが氏は美しい日本服を着た一婦人を携帶して (Heroldo 紙の報する所によるとこの婦人頭髮を“éoomage”に結つてた由—Red.) 壇に上つた。婦人は聲樂家ですつかり日本人になりすまし Süstr 氏による日本歌詩の解説が済むと民謡「沖のかもめ」や白秋の「からたちの花」の獨唱があり、次は梶原氏作の「鼠の結婚」の暗誦、エス語で「鶯」の獨唱、又萬葉集中の短歌三つの暗誦、日本語で「大正天皇奉悼歌」、「富士山」の獨唱等があつた。永田氏夫人は今までエス語を全く知らなかつたが其の夜私が以前 Süstr 氏に寄贈した所のエス語全程を見て歸る時にはエス語で Dankon! と挨拶をした。因に Süstr 氏は本年9月頃「日本宗教の夕」を催す由、日本の同志より其材料の御惠與を願ひ度いさ、宛名は J. Süstr, lahudkārštvi, Dlauhā 53, Praha I, Čekoslavakujo. (乙部泉三郎氏報)

女學校にエス語の科目を

Olomouc の市當局は本年1月23日付けの市令で市立女學校に隨意科目としてエス語科目を編入するのを許可した。二月早々より實行され、講師は校長自らが此に當つた。

フランス

市會より補助金下付

シヤロン・シュル・マルヌ市々會は前年の例に倣ひ本年も同地エスペラント會に補助金を與へる事を決議し講習會の爲には市廳の一室を無料で貸與する事になつた。

大學記要にエス文の摘要

トゥールーズ市の理科學大學はその發表機關たる“Annales de la Faculté des Sciences de Toulouse”に採録する論文には今後すべてエス文の摘要を付する事になつた。

中學校の記念祭

サン・オメエル市の中學校エスペラント會は設立以來已に一昔以上になり昨年十二月十五日ザメンホフ誕生祭に設立以來十二週年の記念祭を舉行した。中學校長の司會の下にダンチツヒの大會の幻燈や喜劇“Vangofrapo”等が演ぜられた。

ドイツ

ベルリン昨年の活動

ベルリンに於て1月24日ベルリン・エスペラント聯合の年大會が開かれた。その報告によると昨年中の同聯合會の活動は次の數字に表はれて居る。集會24回、北米合集國や日本の同志を招いてなした宣傳講演會6回、講習會は22回で參加者400人に上つた。

バヴァリア議會の討論

ミュンヘン市エスペラント聯合會の發企でエスペラント請願が議會に提出され議會に於て大いに討論せられた。保守黨議員はこそこそに反對したが已に確立せられて居るエス語の實用性に就ては承認せざるを得なかつた云ふ。同じ獨逸に於てもサクソニアの文部當局はエス語教師の爲に少からぬ額を支出して援助して居る、比較して考へると面白い現象である。

ギリシヤ

新しいアテネの文化

ギリシヤ政府が布告を發してアテネ市の各師範學校にエス語を隨意科目として編入せしめたのは一昨年十月二十八日の事であるが、その後文部大臣は變つたが布告には變りなく着々と實行を續け現在は二ヶ所でエス語が教授せられて居る。

ハンガリヤ

新興の意氣

一萬數千人の會員を擁するハンガリヤの勞働者文化協會聯盟はその規約中に同聯盟の國外交通公用語としてエスペラントを採用する旨の一項を付加する事に定まり古い同志が其の衝に當る事になつた。

ポーランド

こゝでも日本紹介の夕

Lwów 市のエスペラント會はダンチツヒの萬國大會以來發潮たる活動を始め同地に開かれた東洋に關する國際見本市にエスペラント展覽場を設ける等新しい進出振りを見せて居る。昨年11月12日には音樂會を催し、その第一のプログラマーとして同市の熱心な同志、Schnitzer 氏が幻燈を利用して「現代の日本國とその國民及び文學藝術」に就いて講演をした。同市の名士も多く參會し多くの新聞雜誌も好意ある報道を掲載した。此の市のエスペラント會“Societo Esperanto”は前大臣にして現に商業會議所長たるスレスボウイツ博士の支持を受けて同市の Eksporto-Akademio (高等貿易學校とも譯すべきか) にエス語科を設ける様に努力して居る。

ラトヴィア

校名をエス語で

リガ市に新しく設立された教育團體はその命名に當りエス語で“Estonta lernejo”と名付けた。此の學校の目的とする所は勞働者の精神的物質的進歩向上を計らんとするものであつてその創立者の中には數名の同志が加はつて居る。云ふまでもなくエス語部も設けられた。

道 報 地 内

JODK のエス語講座

ラヂオエス語講座は J O C K の放送を皮切として昨冬 J O A K がテキスト一萬五千部を賣り盡した盛況を呈したことは吾人の喜びとする所であるが今回 J O D K (京城) 放送局も時勢の進運と他局の成功に鑑みエス語講座放送を開設し去る 4 月 11 日から一ヶ月間毎週月水金の三回午後 6 時半から 30 分間宛放送することとなつた。講師は山本作次氏で主催は朝鮮エスペランティスト聯盟會である。テキストはラヂオ加入者へ無料配布することである。

ラヂオ雄辯大會

名古屋放送局最初の試みであるラヂオ雄辯大會は八十餘名の應募者中より選拔せる八名により C. K. 聴取者の非常な期待の中に 3 月 4 日 13 時より放送を開始した。

演題は「中等教育と外國語」。その結果は英語教授方法改良論者三名 (中一名 一等賞) 英語偏重を避け英、佛、獨語教授の論一名 (二等賞)、現状維持論一名。外國語教授全廢論者三名 中一名は日本語を世界語たらしめよで三等賞。一名は規定時間超過のため中止結論に到らず。残りの一名は、大垣の同志森島松三氏の孤軍奮闘的獅子吼であつた。

「廿世紀の驚異たるラヂオが世界の隅から隅へ大きく大きく波打つて時々刻々として移りゆく世界の動きを全世界に傳へ……中略……地球が人類の手によつて征服されつゝある現状より説き起し……こうした情勢の現在にあつて中等教育英語科全廢又は半減の叫ばれるのは如何なる理由でせうか? (對外的言葉の必要を前提とするけれ共、前辯士の“日本語を以て世界と語れ”は暴論であると説破し、次いで中等教育英語科全廢、半減論の叫ばれる理由及び國際的用語として學ぶべき外國語の絶無たる理由から國際語の必要に説き及ぼして)……中等教育英語科廢止の聲高くなれ! エスペラント採用の聲高くなれ。五角の緑の星、日章旗の下に燦として輝け!」の美辭を以て結んだ。

今回の審査規約「辯舌振りよりも内容を主とすさあり」内容は勿論、音吐共に佳良にして充分一位に推すべき出来榮へなりしに第三位にさへ推されなかつた。六年前、名古屋 Y.

M. C. A. 英語社交會主催の下に縣會議事堂で開かれた愛知縣下中等、專門校學生雄辯大會に於て、審査員の大部が英米人たりしに關らず實質本位の審査によつて「世界恒久平和のためエスペラント」が第一位を占めしを回想し、又今回審査にあたりし者が全部日本人にして高等學校教授連たりしに思ひを馳する時その頭の古さが窺はれ憐憫の情禁じ得ないものがある。(名古屋 Montokampo 生)

東京

東京新宿の紀伊國屋書店では中川紀元、木村莊八、今和次郎及び同店主田邊茂一の四氏の編輯の下に、美術雜誌 ARTO といふエスペラント語の名の雜誌を發行した。★ 4 月 27 日 19 時より、三田慶應エス會では、三田通り stelo 階上にて、第三回四谷、三田エス會親睦會を開催、會する者僅々 12 名であつたが、皆よく胸襟ををひらいて相語り 21 時散會。

名古屋

名古屋エスペラント協會主催の中等科は 3 月 13 日より毎週火金の二回開催中。講習生 15 名、講師は下村鑛造氏。「倫敦塔」を了へし中等科は引續き輪講を開始した。詳細は大學病院前電停北半丁東側同協會宛照會を。★ Čechoslovakujo の同志 Pospíšil 及秘書ヒビル兩氏は 3 月 21 日夕刻名古屋市に現はれ山田弘氏宅訪問。山田、下村兩氏の案内にて市中散策し同夜は山田氏宅一泊。翌日上掲の兩氏及白木氏を加へた五人連で新愛知、名古屋兩新聞社訪問。その後は白木氏宅に宿泊し毎日活動見物等によつて旅の疲れを充分慰した。25 日夜睦ビル東のアサヒ喫茶店樓上に於て兩氏の歡迎會開催、同志二十餘名參集。特に兩氏滞在中は官憲が便宜を與へ 26 日京都に向け發つた時も私服の刑事が同行護送した。(山田弘氏報)

京都

3 月 1 日より 3 月 7 日まで京都郁文小學校では郁文青年團主催の下に、初等講習會開催、講習生は 70 名の多数にのぼり、中皆勤者は 30 名、皆非常に熱心であつた。講習終了後團長池田氏より講習終了證書授與式及び茶話會を催す。講師は内藤良一氏。★ 3 月 15 日 19 時より京大樂友會館で京都エスチストの集會を催す。八木、中原、中野の諸氏を始め會する者十數名。Postkongreso の相談、出席者の gvidi せる講習會等の話に 22 時頃迄愉快に過した。★ 4 月 1 日より

京都市外醍醐村にてエスペラント初等講習。講習生は中學、師範の生徒で拾數名、講師三高エス會吉田金三郎氏、五日に茶話會をやる。同志南桑原これに出席。★4月1日より毎日曜午後七時よりカニヤ書店階上で Paroladoj de Zamenhof の輪講をやる。同志の御参加を歓迎す。★4月10日より同所において青年團々員に對して初等講習、約40人、講師同じく吉田氏、目下やつてゐる最中。★4月15日、19時より京都エスペランティストの例會を樂友館にて行ふ、集る者拾數名、(八木、中原、南、矢戸、内藤、桑原……)。★4月16日より三高にて午休みの時間に三高生に對し初等講習、取講生70名、講師奥山才二耶君。★4月23日より京大醫學部にて内藤良一氏指導の下に初等講習開かるゝ筈。

福岡

田部郡後藤寺町では3月18日同町公會堂に於て下記の如き演題で講演會を開催。

世界の現勢とエスペラント	磯部幸一氏
エスペラントの歴史	林 道治氏
創案者ザメンホフ博士	中村榮女史
漫談 (エス語にて)	林 茂氏

閉會後田江氏主唱の下にエス語研究會組織の計劃。

大津

縣立大津商業學校では、3月21日より同28日まで毎夕3時間宛、中大路氏宅にて第一回初等エス講習を開催、講師は中大路氏。以來、同校内にエス會を創設し幹事として青木、磯崎、内貴の三氏を推す。(寫眞參照)

三重縣

縣立松阪商業學校エス會では岡田源平氏卒業のため水谷良一君が代つて同會代表者となられしと。★飯南郡波瀬村補習實業學校でエス講習會開催。講師藪谷氏。(寫眞次號へ)

下關

關門エス俱樂部主催のエス短期講習會は2月1日より最初の十日間は毎夕、以後は火、金曜日を選んで市内丸山町佛教婦人會實費診療所階上の一室に開催。講師は高須氏。尙4月より中等講習開設の豫定。會場は熱心なる同志、山川氏の御盡力により今後共診療所の一室を無料にて借用するとの事。(寫眞參照)

鹿兒島

鹿兒島高農に於けるエスペラントの歴史は十數年の久しきに亘り、其間多少の曲折はあつたが今日までは堅固な基礎の上に確實な歩みを續けてゐる。而して地味な學術研究の會合により毎年目覺しい發

展をなしつゝある。同校の老博士、重松達一郎氏は二十數年前からの同志で、その熱心な研究、宣傳、實用は高農教授連を感動せしめ教官を始め御家族にまで宣傳をされてゐる。尙高農、七高其他一般の同志は毎月2回同先生の御宅で研究會を開いてゐる。目下高農では、本年度の徹底的な宣傳並びに講習の準備を爲しゐるこの事。清水氏報 (寫眞參照)

別府

別府エスペラント會では2月22日より2週間(1週6回、19時—21時)麻生氏方にて第五回初等講習會を催す。講習生11名、講師は福田氏。尙4月、中外博覽會開催中を機とし、別府市に於て大分縣エスペラント大會を開催の由。

新聞雜誌とエス語

★國際聯盟協會の機關誌『世界と我等』の三月號 135-137 頁に亘り「平和の言語 Esp.」の題下にエス語に關する論文掲載さる。(京都 佐藤義雄氏寄稿)

★社會運動資料『レポート』には小澤豐子嬢の努力により LA DOKUMENTOJ DE SOCIA MOVADO といふ Esp. 語標題をつけてゐる。

★京城日報では『バビラーヂョ』といふ挿話の欄が設けられてゐる。

★『國際教育とエスペラント』(海外之日本、二月號)——栗飯原氏稿——

★本學會理事長中村博士は第十六回エス大會を機とし4月5日-12日向ふ一週間に亘り萬朝紙上に「エスペラントの世界現状と我國綠化運動」なる題下にて論説を發表し Esp. の重要性に關し識者の注意を喚起した。尙同紙は毎週月水の夕刊に Esp. 欄を設け一般の普及に努めてゐるが、この試みは多大の好評を博しつつある。

★エスペラントの普及獎勵を宣言す (3月18日萬朝社説)

★九州エス語大會記事 (4月4日福日)

★來年アントワープ開催の萬國エス會に臨む林好美氏 (3月29日 昭和新聞記事)

★國際語の文學的使命 (4月10日京城日報)——守隨商學士寄稿

★京城放送局のエス語講座開設、講師山本作次 (4月9日 京城日報記事)

★萬國共通語としてのエス語 (4月7日-8日 英文大阪毎日所載、米國桑港市 同志ハリー・エドワーズ氏寄稿)

★エドワーズ氏論説に對する賛成意見(4月14日同紙、小泉政利氏投稿)

★ザメンホフ祭記事(4月17日、函館毎日新聞)

★『世界と我等』五月號 232頁子供のページにワルソー市の老尼が我國の少女に宛てたエス文の手紙の譯文あり。

★3月26、27日、京都日出新聞、Pospisil

Bohumil氏に關する記事。★3月29日、エスベラント雄辯大會の記事。★4月6日、大朝京都版、「京阪兩都で氣勢をあげるエスベラント、觀櫻や雄辯大會」といふ見出しで。★4月8日、大毎京都版、Postkongresoの記事。★4月10日、大朝、大毎京都版に雄辯大會の盛會であつたといふ記事。大朝は寫眞入りで書き立てる。

綠星旗下の集ひ

【寫眞説明】「上圖」鹿兒島高等農林學校エス會同志の少照。右より前列、文章堂店主、西原、花田、梅野、重松先生、石、清水、池田、古野。後列、梶原、本田、久井、末永、久米、上村、池田、久保山、石橋、岡田、宮下、稻留、小川の諸氏。「中圖」關門エスクラブ(下關市)の講習會茶話會の夜撮影せしもの。向つて右より前列 高須、野原、棟久、田中、岡崎、山本。後列 城谷、成定、赤座、田中、中山、田尾、山川、山口の諸氏。「下圖」大津商業學校における第一回講習。前列中央 青木幹事。中列中央 中大路講師。



第十六回日本エスペラント大會參加記

~~~~~【來年度大會は東京にて開催決定】~~~~~

例年の年中行事たる日本エス大會の本年度大會は去る四月七八兩日大阪市にて開催され九日には京都にて postkongreso が催された。所で同大會の記事は本年度は主催者たる大阪エスペラント會 (Osaka Esperanto-Societo) がその protokolo (議事録) を發表することに決定し大會豫算中の大枚90圓をその印刷費として決定しその protokolo は本誌六月號の附録として添付することとなつてをりす。それで本月號に大會の報道をのせてもそれが重複することになりますから大會記事は本月號にのせませんから、來月號附録として添付される protokolo を御覽下さる様御願ひします。

こゝには大會の側面觀さといふべき參列感想記を書きます。何分 protokolo がでるさ判つてゐたので我々も例年の如く本誌記者として大いに記事材料の蒐集をする事もいらすホントにのんびりとした氣分で參列ができたのはこの上もないありがたい事であつた。今後はこの bona ekzemplo に従つて常に protokolo をだしていたゞきたいものである。

扱本年の大會は御承知の様に最も經費を節約することをその最大特色とされたのであつた。從來毎年東京で大會が開催されてゐた當時は大會の費用も 100 圓乃至 200 圓位の所であつた様だが大正12年岡山をふりだしに仙臺京都、福岡と地方へゆく様になつて數百圓甚しいのは千圓を突破する様な費用をかけて大會を催したのであつた。成程大會は同志の懇親及協議を主とする一方、他方には對外 demonstracio といふ大きな要素があるからでもあるが、しかし大會後まで借金を背負はねばならぬ様な大會は一寸ごうかと思はれる。既に數年前ウキーン市で開かれた萬國大會はそのよい見本で大會の結果多額の借金を背負ひこんで、幹部連の家へは執達吏が出張してすべての器物の封印は勿論全財産をなげだしても足らぬといふ人々がで、その窮乏を全世界の同志に訴へた程である。こうなつては benata kongreso も malbeninda kongreso となつてしまふ。こゝにいふ意味からみて今年度の大會の準備委員たる大阪エス會の同志諸君の緊縮ぶりは稱揚に價するものと思ふ。今後の大會もよろしくこれにならつて緊縮一點張でいつてほしいものだ。もし寄附金がありあまる程あるのならばそれで紀念の書籍 (エス

書きの) でも出版すればよいと思ふ。總べて生きた言語は日常多數の人々に語られ話されることによつて、その生命を有するものである。エス語の如き國際語は日常の用語としてこれを話してゐる人の數は殆んど問題にならぬほど僅少である。しからばエス語をして、vivanta lingvo として誇稱せしめるものはエス語の文献の存在によるのである。この意味で大會の寄附金が大いに剩餘を生じた様な場合には圖書出版の基金として良書 (エス文の——しかも價值のある) を出版する事は最も有意義であると思ふ。閑話休題濱口氏緊縮振を發揮した本年度大會の特色ある豫算案を拜見するさ次の様である。

| 収 入                           |          |
|-------------------------------|----------|
| 參加費 (50錢×200人)                | ¥ 100.00 |
| 日本エス學會寄附金                     | 60.00    |
| 不足額 (準備委員の手で都合す)              | 82.30    |
|                               | 242.30   |
| 支 出                           |          |
| 會場借賃                          | ¥ 20.00  |
| 同特別費                          | 15.00    |
| Protokolo 印刷費                 | 90.00    |
| Adiaŭa Kunsido 茶菓費 (20錢×200人) | 40.00    |
| Kongresa Libro (8 錢×300)      | 24.00    |
| Kongresa Karto                | 3.30     |
| 雜 費                           | 50.00    |
|                               | 242.30   |

この豫算通りにうまくいつたか否かは protokolo に發表されることと思ふ。

次に本大會の特色は參加者各人から參加費として金 50 錢宛を徴収したことである。これも參加者は kongreslibro その他をもらふのだからその代償として考へても決して悪い譯ではない。萬國大會は常にこれをさつてゐる。

★第一日 (四月七日) 會場として決定してゐた大阪醫大に對して前日六日の午頃急に大阪府廳の特高課から壓迫がありエス大會の會場とする事をやめよとせまれ醫大當局も困つてトウトウ拒絶して來たので準備委員も暗から棒をくつた貌で急に土佐堀の基督教青年會館へ交渉してヤット借入れることができて大安心。しかし急の事で通知が間にはず各驛へ綠星旗をもつた samideanoj を見張におい



## 第十六回エスペラント大會參加者



〔寫眞説明〕 1. 藤間常太郎 2. 西田英夫 3. 田中政夫 4. 進藤靜太郎  
5. 川崎直一 6. 柴田恭二 7. 米田徳次郎 8. 高橋 一 9. 辻 利助  
10. 相坂 信 11. Pospíšil 12. 山中英男 の諸氏

て会場變更を知らせたが中には醫大まで行つて引返してきた人も大分あつた。この前の大阪エス會の發會式の時も制服の *policianoj* が見張にきたそうで大阪の *polico* は *verda* と *ruĝa* の區別のできぬ色盲かもしれぬ。大會の第一日第二日共に *policianoj* や *spionoj* が御出張に及んだ。エス大會にこんな警戒振は空前の事かと思ふ。扱第一日は午後七時から右青年館で發會式が行はれた。高橋一氏が準備委員を代表して流暢にしてしかも熱のあるエス語の名演説を以て挨拶され米田徳次郎氏を名譽會長としてその發會式の司會を御願ひし各地方會代表者の挨拶があり祝電の朗讀等あつた。Laborakunsido に移つて浅井惠倫氏司會の下に明年度大會開催地決定の件に關し協議したがこの地方會からも招待がなかつたので東京同志を代表して三宅ひさの嬢が來年度大會を東京へ *inviti* する旨をのべ異論なし拍手喝采裡に可決確定した。

それから明日の各 *fakaj kunsidoj* 世話人からそれぞれ説明や注意があつて無事19時頃式をさした。扱この地方會の挨拶についても前もつて準備委員から全国各地の地方會に對して招待狀をだして代表者は委任狀 (*mandato*) を所持すべしと通告した如きも本年度大會の特色であらう。

★第二日(四月八日) 前日に引續いて快晴9時半から *fakaj kunsidoj* を開いた。Esperantologoj, 醫家, 宗教家, 新聞雜誌記者, UEA-anoj, 盲人の六分科會あり。その中盲人のはくりあげて六日の晩に開いた由。川崎直一氏等の提稱によつて開かれた Esperantologa

Fakkunsido (エス語學分科會) は初めての催であるので澤山の參加者傍聴者があつたが豫報されてゐた浅井惠倫氏の「Esperanto kaj Hindeŭropa Pralingvo」の講演も近藤國臣氏の *Ido* についての講演共に講師の都合でなかつたのは遺憾であつた。それで岡本好次氏が「新撰エス和辭典編纂に際して氣付いた諸問題」についての講演と小坂狷二氏の「*lingva unueco kaj normigo*」といふ題での講演があつた。共にエス語研究者にとつて有益な話であつた。今後この *fakkunsido* が繼續される事をのぞむ。その他の *Fakkunsido* では人體例年の様な決議がくりかへされたが UEA-anoj の *kunsido* では UEA が *Esp. movado* の *oficiala institucio* の一であり *Akademio* の決議を無視して國名に *-io* を用ふることに對する抗議的の手厳しい決議をなしたのは特筆大書すべき事であらう。中食は大きな食堂がないため *komuna manĝado* もできなくて遺憾ながら各人勝手に食事をした。(もし醫大を会場として使用してゐたのならこの *komuna manĝo* も豫定通りスラスラと行つたにちがひないのである。——会場撰定の際もこの YMCA が候補の一つであつたが大食堂のないため醫大にきめたのだそうなの) 午後は再び *Labora kunsido* に移りそれから財團法人日本エス學會の維持員會に移り大阪醫大の安田龍夫氏司會の下に三石理事の昨年度會計報告、岡本評議員が大井理事の代理として昨年度事業報告をなし次いで別項記事の如く新に學會役員會で立案の財團法人としての内規及び維持員會會則(維持員會支部に關する



規定)を提示し(謄寫版刷にして配布)岡本氏立案の由來を説明の上質問に對し答辯し逐條審議の結果いろいろ修正意見もでたが實際實行上はやはり原案による外ない事をみこめ原案のまゝ満場一致可決された。これは近々再度役員會を開き正式に確定の上來月號誌上に發表される筈。これで學會維持員の kunsido を終り次いで再び Labora kunsido に移り田中一氏司會の下に各 Fakaj kunsidoj の報告あり17時閉會。別室にて adiaŭa kunsido をひらく、茶を喫し菓子をかぢりながら相坂佶氏司會の下に大阪の同志を始め各地から參集の同志の五分間演説や歌その他餘興あり暮色蒼然としてあたりをこむるまで歡を盡して語り合ひ18時散會。無事大會は終つた。

★第三日(四月九日 Postkongreso) 午前中京都の同志の案内で三々五々嵐山に櫻花をさぐり、午後二時より三高エス會主催の雄辯大會(京大樂友會館に於て)に出席した。出席者約50名。次の如き programo の下にそれぞれ熱辯をふるはれた。

1. 開會の辭 司會者 矢戸圭一氏

2. 南洋への移民 大阪外語 田中政夫氏

我國の人口問題を解決するには南洋へ移民するに若くはない。其處には四時花咲き、鳥歌ひ、邦人にさつても亦永住の地とするに足る。我國人の奮つて移民し、誠實に働かれんことを希望す。

3. 自然は我等に惡を教へる

大阪高工 細谷昌夫氏

歴史は戰、罪、惡に充ちてゐる。自然界は弱肉強食の有様である。然し惡は人生を興味あるものにする。惡は地球と共に存續する。

4. 海の叫び 三高 桑原利秀氏

現在の日本は海外にては排斥され、國內で

は人口過剰で混亂し、不秩序に陥つてゐる。海にまかれ、海より生れた日本は正に海に更生の路を求めねばならぬ。

5. 平和に就いて 關西學院 宇都宮正氏

人は平和を深く強く熱望す。世界平和の爲に屢々會議の行はるゝスミス聯邦も、これが一致には永年を要したのである。我等は先づ心の平和を建設するを企てねばならぬ。

6. 同志に訴ふ 京大 内藤良一氏

我々は Esperantismo を奉じて活動してゐる。併し實際問題として考察する時、眞の平和、幸福は、都鄙に於ける着るに衣なく、食ふに食なき殘滓階級を救ふ事によつてこれが實現を見るのである。

7. 子供の話

大阪府立醫大醫學士 安田龍夫氏

子供を畫いた繪畫、又劇にあらはるゝ子供の役割等に關する興味ある話。

8. 思ひ出す儘に 東大 田邊治夫氏

9. 挨拶 東京 三宅ひさの嬢

10. 所有權 同志社大學 佐藤義雄氏

所有の起原より所有權は義務を伴ふことを力説し權利も亦社會の正常なる現象たることを述ぶ。

11. 不思議な木の葉

京大、醫學士 八木日出雄氏

枇杷の葉は昔より煎じて飲めば種々の病氣に效くと言はれてゐるが、之を外用する事も出来る。其化學的理由は葉の内に含まれてゐる物質より生ずるシアシ酸の瓦斯によることが明らかになつた。枇杷の葉は萬病に效くと言ふ面白い話。

閉會の辭 三高 石井一二三氏

19時より komuna manĝo。各地同志の卓上演説あり。21時散會。

## 第五回九州エスペラント大會記事

——四月二・三日長崎市に於て——

本年度九州エス大會は豫報の如く4月2,3兩日に亘り長崎市に於て開催され次の如き大成功裡に終了した。その詳報次の如し。

第一日 午後七時より長崎市内袋町青年會館に於て宣傳講演會を開催。折悪く車軸を流すが如き大雨にも拘はらず來聽者多數。次の programo により諸氏熱辯を振はる。

開會の辭 帆足雄三郎氏

國際語の是非 淺田一博士

希望に生きる人々の言語 大島廣博士

エスペラントの輪廓 植田高三教授

偶感(エス語) 伊藤徳之助助教授

通譯 城戸崎益敏氏

閉會の辭 浦田種一氏

第二日 大會發會式

10時春雨煙る中を會場たる商工會議所に集つた同志五十數名は何れも大會紀念のinsigno(エナメル仕上二色にて印刷 優美なもので我國エス大會に使用された始めである。殘品あり希望の方は30錢を日本エス學會長崎支部へ



## ★第五回九州エスベ



## ラント大會記念撮影

【寫眞説明】 向つて右より 前列 富松、高見、伊藤助教授、淺田博士、飯田八重子嬢、植田教授、大島博士、江口、古川、兒島姉妹、津守、山佐。 中列 龜石、井上、石丸、西原、倉本、城戸崎、荒木、脇山、安藤、山口、辻、高島教授、浦田、迫。 後列 大場、吉本、中川、橋本、徳永、清藤、關口、永田、高原、帆足、大神、大島、岩隈、濱部、の諸氏。

送られたし)を佩用し、三菱造船所音楽隊の marŝo につれ入場着席。高原氏立つて挨拶なのべ大會々長として淺田博士を議長に植田教授を推薦し満場の拍手賛同を得て淺田博士開會の辭なのべられた。樂隊の伴奏で一同 Espero 合唱、次で植田教授議長席につき伊藤大島兩氏の演説あり。次に支部代表の挨拶に入り江口(福岡)荒木(大牟田)石丸(中津)井上(小倉)大場(門唱)迫(長崎)氏の saluto あり次で有志の parolado にうつり飯田八重子嬢(本年十一歳昨年6月號166頁参照)は落付いた態度で明確な發音で演説満場片唾を呑む。終れば拍手喝采やます。城戸崎、岩隈、辻諸氏の激動演説あり。緊急動機として聯盟の爲盡瘁せられた城戸崎氏の東大入學に付一同拍手を以て感謝の意を表することに決議。次に提案審議に入る。12件。中津石丸氏を聯盟幹事に、久留米速水氏を聯盟評議員に推薦一中津、大牟田、後藤寺のエス會、リベラエス俱樂部、佛教盲人エス會の聯盟加入承認。大阪エス大會へ江口氏を代表として派遣決定1931年東京での萬國博覽會開催の節、萬國エス大會を日本に招致大阪大會に提案の件。學會支部設置勧誘の件其他可決。

次回第六回大會は大牟田市、第七回は中津町へ夫々同地方會より inviti 申出、一同拍手賛意感謝の意を表す。樂隊の奏樂裡に Tagiĝo 合唱、議長の挨拶あり閉會。奏樂をきゝつゝ中食、終つて紀念撮影。午后天氣霽れ長崎税關港務部長深田氏の好意により同波止場より汽艇にのり女神檢疫所の櫻見物、委員

高原憲氏の令弟勉氏自働車にて來往パターシネマ撮影、港内周遊終つて市内見物。午後五時より大徳寺支那料理通天閣にて晚餐會。卓上演説の後パターシネマ "Printempo" の映寫に移る。之は長崎クラブの gesamideanoj が大會準備の忙かしい中に高原勉氏を煩し撮影して貰つたもので、遠足登山の途中山上の kunmango の氣分がよく出て居り其他面白い kinemo と共に當日午后の櫻見物の場面を太急ぎ現象仕上エス文字幕を入れて映寫一同畫面に活躍せる事とて大喝采であつた。かくて Vivu Esperanto! を三唱して目出度大會を終つた。(福岡日々新聞社は寫眞斑まで送つて大會記事を掲載した。)

## 鐵道從業員の活動

大正十、十一年頃日本鐵道エスベラント會の旗の下に燎原の火の如く燃え上つた鐵道從事員間のエスベラント活動はその後漸次下火になり、大震災と共に會の活動は全滅したかの多き觀を呈した。火災に依つて枯死したと思はれた樹木も數年経たる昭和三年の春の光を受けて再び芽を出した。エスベラント活動が大震災に依つて壊滅されよう筈がない。年経ると共に力強く芽をふき出す事は樹木が芽を出したよりも更に一層自然である。

一昨年來保坂成之氏指導の下に本省及東鐵管内の數名の者がさゝやかな輪講會を續けて來た。實に存在さいも知られない様な小さな會合であつた。現在も "Danco de Skeletoj" を用ひてこの會合は續けられて居る。而して



この間の保坂氏の熱心なる指導は数名の良き同志を得ることに成功した。小坂氏の歸朝は之等の同志に更に力を加へるものがあつた。昨年の暮この少數の輪講會出席者が中心となつて日本鐵道 에스ペランチスト同盟の創立が計畫された。『吾々の活動を着實に!!』とはこの輪講會の人達の合言葉であつた。従つて同盟は徒らに會員數の多からんことを望まない數少く共熱心なる同志を得たいのである。然し乍ら數名だけ「おかたまり」を成して研究

を續けるのみであるならやがて活動は固定し柔軟性乏しきものとならざるを得ない。此處に於て吾が日本鐵道 에스ペランチスト同盟は4月14日より6月末迄毎週土曜日13時—15時第一回の初等講習會を主催する事になつた。場所は丸之内鐵道クラブで講師は小坂狷二氏です。開會までに講習生、本省35名、東鐵管内16名、鐵道外部1名、合計52名を得た。

最後に吾が同盟は地方各地の Fervojistaj Esperantistoj との聯絡を望むものである。

## 日本 에스 學會にて 年額三圓の正維持員を新しく設く

大阪に於ける日本 에스ペラント大會を機とし、學會維持員總會を開催し、席上財團法人日本 에스ペラント學會維持員會々則並に支部設置規定を審議すべしと二三の地方會の要求ありたるに鑑み、本財團は3月31日19時より丸ノ内鐵道クラブに理事及評議員の合同協議會を開催し、中村理事長議長の下に種々審議の結果、本財團寄附行爲内規及本財團維持員會々則原案を作成した。

七時半開會、岡本評議員起ちて本協議會開催の理由として最近地方維持員中より來る日本 에스ペラント大會を機としてその議題中に維持員會則並に支部規定に關する件を上程すべしとの意見出でたるを以て、この際上記に關する學會役員會の大體の態度を決定する必要ありと述べた。徳田氏會費三圓説を出す。

次いで徳田氏の草案をもととして逐條審議に移り、種々議論の末大體まとまつた案を得その字句修正等は小委員の手にて決定のこゝとした。かくて小委員會にて字句を修正したものを謄寫版刷にして大阪での本年度大會中日本 에스學會維持員會に附議し別項記載の如く何の修正もなく可決された。いづれ近々正式の役員會に附して可決確定の上來月號誌上で發表する運びになる事と思ふ。扱その大體の骨子と要點をこゝに申上げる事とする。

つまり今度の案は二個の案からなりたつてゐて一つは我が財團法人 에스學會の内規で他は學會維持員會地方支部といふもの、案である。前者は財團法人寄附行爲を補ふ諸事項でこれは學會が法人となる以前に學會々則の中に規定された條項で學會が法人となつてすぐ決定すべきであつたのが種々の故障のためその儘となり只その從來の規定を成文とせず習慣的に認めて實際の仕事をやつてきたのであるが何時迄もそのまゝではよくないのでこゝに成文にしたまで、あるがこの際多數維持員の意向を入れ從來の維持員（維持員とは法規

上の呼び名で實質は會員である。——それで本誌上では會員とよんだり維持員と呼んだりしてゐる）の種類の上に年額三圓を拂込む正維持員と云ふものをおくことにし學會を眞に支持して下さる御考の人でこれ迄普通維持員であつた人々はぜひこの正維持員になつていただきたいと思ふのであります。普通維持員の會費二圓四十錢では學會はたゞ損益なしの經營を續けてゆけるだけで宣傳上必要な諸費用はこゝでも捻出できなかつたのです。それでこの際その宣傳資金を特種の會員から仰ぐ必要がありましたが從來の賛助維持員は年額5圓で少し出し難くその爲その人數も僅少でしたから一人あたりの金額の増加は僅少でも人數が澤山ある事は最も必要であるを考へ普通維持員とは年額たゞ60錢の差にすぎぬ正維持員といふ新しい種類を設けてなるべく金に餘裕のある人がこぞつてこの正維持員になられんことをのぞんでやまない次第です。

財團法人日本 에스學會維持員會々則及支部規定の方の事については紙面もありませんから來月號にて詳細に發表致します。

## ★ 個人消息 ★

★福富義雄氏同志金澤キノエ嬢と去る4月6日華燭の典をあげられ即日披露の宴席より御同伴で東京驛へむかはれ7日から大阪で開かれた大會参加のため旅立たれた。新婚旅行を兼ねて大會に参加されたのは多分同氏夫妻を以て鎬矢とすることと思ふ。こゝに謹んで祝詞を申上ます。

★小坂狷二氏——先々月牛込區新小川町2の11番地へ引越された。（學會のすぐ近所です）

★岡本好次氏——小石川區音羽町9の19へ轉居さる。（學會より徒歩15分程）

★守隨一氏は4月帝大經濟科を御卒業。

★弘前市大火の爲成田義邦、小西吉雄、長澤剛三氏の御罹災に對し深く御同情申上ます。



# エスペラント初級講座

## 【第 八 講】

守  
則

1. 最初から本文の譯讀を試みるこゝ。但、極く初歩の方々は先づ譯文によつて内容をつかむのもよろしい。
2. 單語、語法の不審な箇所は番號により、單語、語法の欄を参照し更に譯文によつて全體としての意味を闡明すること。

### Dio de Dormo—Merkredo—

La cikonio<sup>1</sup> rakontis pri la varma Afriko, pri la piramidoj kaj pri la struto<sup>2</sup>, kiu galopas<sup>3</sup> tra la dezerto<sup>4</sup> kiel sovaĝa<sup>5</sup> ĉevalo, sed la anasoj<sup>6</sup> ne komprenis, kion<sup>7</sup> li parolis, kaj tial ili puŝis unu la alian<sup>8</sup>: “Ni certe ĉiuj konsentas pri tio, ke<sup>9</sup> li estas malsaĝa?”

“Jes, kompreneble<sup>10</sup> li estas malsaĝa!” diris la meleagro<sup>11</sup> kaj kriis “glu- glu- glu-!” Tiam la cikonio eksilentis kaj pensis pri sia Afriko.

“Por la amantoj<sup>12</sup> de maldikaj<sup>13</sup> kruroj<sup>14</sup>, viaj<sup>15</sup> estas tute belaj!” mokis<sup>16</sup> la meleagro. “Kiom kostas ulno<sup>17</sup> da ili?”

“Ha, ha, ha, ha!” rikanis<sup>18</sup> ĉiuj anasoj, sed la cikonio ŝajnis<sup>19</sup>, ke ĝi<sup>20</sup> tion tute ne aŭdas.

“Vi povas tute senĝene<sup>21</sup> ankaŭ ridi!” diris la meleagro, “ĉar vere en miaj vortoj troviĝas multe da sprito<sup>22</sup>; aŭ eble ili<sup>23</sup> ŝajnis al vi tro ‘malprofundaj? Jes, jes, li ne estas multflanka<sup>24</sup>. Ni konservu<sup>25</sup> niajn ŝercojn<sup>26</sup> por ni solaj!” Kaj la kokinoj klukis<sup>27</sup>, kaj la anasoj kriis “gik-gak, gik-gak!” Terure<sup>28</sup> gajaj ŝajnis al ili iliaj propraj ŝercoj.

Sed Hjalmar iris al la kokinejo, malfermis la pordon, vokis<sup>29</sup> la cikonion, kaj ĝi elsaltetis<sup>30</sup> al li sur la ferdekon<sup>31</sup>. Nun ĝi estis iom ripozinta<sup>32</sup>, kaj ŝajnis, ke ĝi balancas al Hjalmar la kapon, por danki lin. Poste ĝi etendis<sup>33</sup> siajn flugilojn<sup>34</sup> kaj ekflugis al la varmaj landoj; sed la kokinoj klukis, la anasoj kriis, kaj la meleagro ricevis tute ruĝan kapon.

“Morgaŭ ni kuirs el vi<sup>35</sup> supon!” diris Hjalmar, kaj tiam li vekigis<sup>36</sup> kaj kuŝis en sia liteto. Tre rimarkinda<sup>37</sup> tamen estis la vojaĝo, kiun la dio de dormo lasis lin fari<sup>38</sup> en tiu nokto.

### 眠 り の 神——水 曜 日——

鶴は暑いお國のアフリカや、ピラミッドや、野放しの馬の様に沙漠を驅ける駝鳥の事などを話してきかせましたが、家鴨達には鶴の話す事が何のこゝとやら皆目わかりませんでした。そこで家鴨達は又お互に押し合つて、「あれはお馬鹿さんよ、本當にさうぢやないこと?」(彼が馬鹿であると云ふ事に就いて、吾々はきつと一人残らず同意するでせうね)。

「御尤も。あれの馬鹿な事は無論だよ」七面鳥は斯う言つて、グル、グル、グルと啼きました。この時鶴はフト黙り込んで、お國のアフリカの事を考へました。

「痒せこけた脚の好きな者には、お前の様な脚でもまんざら悪くはあるまいよ。」七面鳥は嘲りました。「一尺おいくらかれ」。

「アハハハハ」家鴨達は皆んな冷笑をあげましたが、鶴は何も聞かぬ振りをしてゐました。

「お前さんも別に氣にかけずに笑つたがいゝよ。わしの言葉は洒落だらけなんだからね。それとも、これでも未だお前さんには淺すぎると言ふのかい。(彼等——私の言葉——がお前に



は餘りに淺すぎると思はれたのか。)さうだ、さうだ、こいつは餘り利口ぢやないや。俺達の洒落は俺達仲間だけにしておけばいいんだ。」「(私達は私達の洒落を私達だけにこつておこう)。と七面鳥は申しました。そして牝鶏はコッコと啼き、家鴨達は「ギック、ガック、ギック、ガック」と啼きました。彼等にこつては、自分等仲間の洒落が、こよなく陽氣に思はれました。

然し、ヤルマールは鶏小屋の處へ行つて戸を開け、鶴を呼んでやりました。すると鶴は甲板の上へ、ヤルマールの方へ、ヒヨコヒヨコ跳び出して來ました。さて鶴も、もういくらか體が休まりました。鶴はヤルマールに向つて頭をふつて感謝してゐる様に見えました。それから鶴は翼を擴げて、暖國指して飛び立つて行きました。一方、牝鶏はコッコと啼き、家鴨達も啼き、七面鳥は顔を眞赤にしました。

「明日、お前等をつぶしてスープにしてやるよ」とヤルマールは申しました。その途端、ヤルマールは眼が醒め、自分の床の中に入れておきました。それはさもなく、眼りの神がその晩ヤルマールにやらせて下すつた旅行は實にすばらしいものでした。

【單語と語法】 1. 鶴。 2. 駝鳥。 3. 疾驅す、跑ける。 4. 沙漠。 5. 野生の、野蠻の。 6. anaso (家鴨)に sovaĝa を冠して sovaĝa anaso とすると鴨と云ふ意味になる。 7. kion, kiom 等は通常夫々 tio, tiom 等と共に用ひられるのであるが、これを省略する場合がある。かゝる場合には當然意味の上で之を補つてゆかねばなりません。こゝでは、tion, kion li parolis. 類例。——Kiom mi povas scii, la urbo tuta bruligis. 私の知つてゐる限りでは、町はすっかり焼けたさの事。 8. 相互に。 9. pri tio, ke; por tio, ke; pro tio, ke など皆その後、frazo を伴ふ場合の用法で、tio を以て ke 以下の文を受けることになります。

例：— Li persiste neniom parolis pri tio, ke li mortigis sian edzinon.  
彼は自分の妻を殺した事に就いては、口を閉して語らなかつた。  
Mi elkore vin dankas por tio, ke vi venis vizite al mi spite malbona vetero.  
天氣の悪いのに態々お越下さいまして、誠に有難う存じました。  
Li eklernis Esperanton nur pro tio, ke ĝi estas facile lernebla.  
彼が 에스ペラントを學び出したのは、唯それが容易に學習出来ること云ふ爲に外ならなかつた。

10. 無論、勿論。 11. 七面鳥。 12. こゝでは……を好む者。anto と isto とは往々混同され易いから充分氣をつけねばなりません。一概に申せば、isto はそれを以つて職業とし又は或主義を捧する者の義になります。例。ĉasanto, ĉasisto. amanto, amisto. instruanto, instruisto. bablanto, bablisto. 13. 細い、瘠せた。 14. 脛、脚。 15. viaj (kruroj). 16. 嘲弄する、冷笑する。 17. 長さの單位で、舊く反物を測るに用ひられたもの。 18. moki と

略同義。 19. ŝajni は、と思はれる、従つて ŝajn'igi は、と思はせる、振りを装ふ。例。Ŝajnigante, ke ŝi parolas al alia homo. ほかに人に話しかける様な振りをして。 20. ĝi~eikonio. 21. 心配なく、氣兼ねなく。類例。Tian aferon vi tute senĝene povas entrepreni! それしきの事をおやりになるのに、何もそう御心配には及ばぬではありませんか。 22. 氣轉、頓智。 23. ili~miaj vortoj. 24. 多方面に亘つた。より轉じて利口な。 25. 保存する、取つて置きにする。 26. 冗談。 27. 牝鶏がコッコ、コッコと啼く。 28. 恐ろしく、ひどく、誤り易い例。terure nigra Kato. terura nigra Kato. 29. 呼ぶ、誰某の名を呼ぶと云ふ場合には、voki iun per ies nomo. 30. el'salt'et'i……からヒヨコヒヨコとび出て來る。類例。Dum kiam li kur'et'ad'is apud Anjono, Karlo pensis, ……カルロはアンニヨ婆やの側をチヨコチヨコ走つて行く間に斯う考へました。 31. 甲板。 32. 休息する。 33. 擴げる、延ばす。例。Li kuŝis etendante sin laŭ longe sur sia dorso. 彼は仰向けになつて長々と横たはつた。 34. 翼。 35. el は……を材量にして、と云ふ意味で、茲では、お前等をつぶしてスープにする。と云ふ事になる。例。Konstruaĵo el ŝtono. 石造の建物(石を材量にして造つた建物) Ŝtrumpo el silko. 絹(製)の靴下。 36. 目を覺ます。例。Ĝuste je la sepa, mi vekigis. 目を覺ましたのは正に七時。Ĝuste je la sepa, mi ellitiĝis. 起きた(床を出た)のは正に七時。 37. 著しき、顯著な。 38. lasi iun fari は、爲すが儘にやらせておく、類例。Lasu min sola; mi ja preskaŭ freneziga. 僕は氣がくるひさうなんだから、構はずにおいて下さい。Tenu vin tute trankvile kaj lasu min agi. 貴方がたは何喰はぬ顔をして、私のやる儘にまかせておいて頂戴よ。



## 第五課

〔Anoncisto〕 J-E-I, J-E-I. こちらは日本エスペラント學會中央放送局であります。これから吉野先生のエス語講座第五講が始まります。

〔Kursgvidanto〕 えゝ、今晚は前回に續きまして Robinsono Kruso の續きを申上ます。前回では無人島に漂着した少年ロビンソンが樹上に不安の一夜を明し海岸で ostroj をみつめて餓えのがれ涯しない大海原を前にして岩にぶつかる單調な波の音にそゞる哀愁の情切なものがあつたさいふ話まででございました。今夕はその次からです。

Robinson pensis pri siaj patro kaj patrino, kiuj estis tiel malproksime; li pensis pri la agrabla hejmo en Hamburgo, kiun li eble revidos neniam. Sed jen li rememoris kanton, kiun tiel ofte kantis lia patrino:

Sed kiu fidas sian Dion

Eĉ en plej granda la mizero,  
Ho, tiu timu do nenion.

Li helpas ĉiam en danĝero.

Tiu kanto konsolis lin kaj kun espero li atendis la estontecon.

【譯】 ロビンソンは今は大變遠くへだたつてゐるお父さんやお母さんの事を考へました。又彼は恐らく再びみる事のできないハンブルグのあの快よい家庭について考へました。併し彼は母親がよく歌つてゐた次の歌をおもひだしました。

神を信するものは

如何に不幸のどんどこにあつても

何ものをもおそれるなけれ

神は常に危険に際して我々をすくつてくれる。

この歌が彼をなぐさめてくれました。そして

彼は希望をいだいて將來に期待しました。

【註】 esti tiel malproksime あんなに大變遠くにゐる。 hejmo は家庭、 domo は家屋、 familio は家族。 re'vidi 再び見る。 re'memori おもひだす。(memori は記憶してゐる事)。 Sed... の歌を普通の順序におくさ Sed tiu, kiu fidas sian Dion eĉ en la plej granda mizero timu do nenion. 即ち最も大なる mizero になつてさへも神を信するものは何物をもおそれるにあたらぬ。 Li helpas... の Li は Dio をさすのです何となれば神は常に人の危険におちいつた際之を救つてくれるのだからの意味です。

Li levis sin kaj serĉis lokon, kie li povus dormi sendanĝere. Kelkcent paŝojn malproksime de la marbordo Robinsono vidis ŝtonegon, krutan altaĵon kaj en tiu li trovis samnivele kiel la tero, kavernon kun mallarĝa enirejo. Se li posedus nur picĉon, pikfosilon, levilon, aŭ rompilon por plilarĝigi la enirejon!—Sed nun tio estis neebla. Krom tio, li ne estos sendanĝera en tiu kaverno. Li pripensis rimedon por fari malvidebla tiun rifuĝejon kaj lin kaptis la ideo ke la arboj en la proksimeco estas speco de salikoj. Tiuj arboj estas facile transplantebaj.

【譯】 彼は立ちあがりましたそして安全に寝むれる場所を探しました。海岸から數百歩距なつた所でロビンソンは岩さ險しくもりあがつた高臺をみましたそしてそこに地面と同じ水準線上に狭い入口のある洞穴を見付けました。鶴嘴か鋸子か土碎きが手許にあればこの入口を大きくするのに!——併しそれは不



可能事だ。その上その洞穴の中でも必しも安全ではない。彼はこの隠れ家を見えない様にする方法を考慮しました。そして近くにある木が柳の一種であるといふ考へにおもひつきました。この種の木は移植しやすいものです。

【註】 sin levi は身體をあげる即ち立ちあがる事。kelk'cent paŝojn malproksime 數百歩の遠くに。類例：La lernejo estas 2 mejlojn malproksime de tie ĉi. 學校はこゝから二哩の遠方にあります。alt'aĵo 高處。sam'nivele 同じ水平面上に（同じ高さに）。en tiu はkruda altaĵo をさす。pioĉo もpik'fos'ilo もいづれも鶴嘴(ツヅ)の事です。lev'ilo 挺子。romp'ilo 土をくたく器具。Se li posedus... は直譯すれば「もし彼が其入口を広げるのにpioĉo, pikfosilo... の様なものをもつてゐるならば」の意です。sen'danĝera 安全。fari tiun rifuĝ'ejon mal'vid'ebla そのかくれがを誰にも見えない様にするこゝ。trans'planti 移植す。

Li pensis: “Mi elterigos per la manoj multajn kaj plantos ilin unu apud alia, tiel ke ili formos barilon, post kiu mi estos sendanĝera.” Tuj li komencis elterigi kelkajn junajn arbojn kaj plantis ilin sur la loko, kie li volis loĝi.

La laboro prosperis tiel malrapide, ke li ĉe la vesperiĝo transplantis nur kvin arbojn.

【譯】 彼は考へました『手で澤山の木を引きぬいてそれを一つ一つ並べて植へてそれが柵を形づくる様にしよう。そしてその柵の後側におれば安全だ』と。そこですぐに彼は稚い小さい木を少し引き抜いて彼の棲まうさしてゐる場所へ移植し始めました。

その仕事は容易には渉らなかつた。即ち夕方になつてたゞ五本移植できただけでした。

【註】 el'ter'igi 地面から引きぬく。unu apud alia 一つを他の一つの傍へならべて。... tiel ke... する様に...、...する程、一つ一つ

並べて植へて丁度それらが一つの bar'ilo (柳)を形づくる様にしたこゝ。prosperis mal'rapide 直譯すればおそく繁榮したの意故仕事に渉らなかつたこゝである。tiel... ke... 大變...なので。

La malsato pelis lin al la marbordo. Sed netrovante ostrojn, li estis devigata pasigi la nokton kun malplena stomako. Sed kie li devus dormi? Li decidis fari tion sur la arboj kiel la birdoj, kaj eĉ tiel longe, ĝis kiam lia loĝejo estos preta. Pro antaŭzorgo li sin ligis per fortika rampkreskaĵo al branĉo de arbo, apogis la bruston sur la trunko kaj ekdormis.

【譯】 飢餓にかられて彼は海岸へゆきました。併し牡蠣は見つかりませんでしたので空腹をかゝへて其夜をすごさなければなりませんでした。さてどこへ寝たらよろしいでせう？彼は鳥の様に樹の上で寝ようゝ決心しました。そして彼の棲家が完成するまではその様にしようゝきめました。用心して彼は身體をつよい蔓草で樹の枝へしばりつけ胸を幹にもたせて寝り始めました。

【註】 dev'ig'ata 強いられる。pas'igi すごす。mal'plena 空(多)の。fari tion のtio はdormi をうける。antaŭ'zorgo 前もつての注意。ramp'kresk'aĵo 這ふ植物即ち蔓をなす植物。(rampi=這ふ)。

こゝにロビンソンの無人島生活が續けられます。その後彼はいろんな原始人的生活を續け様々な苦心をします。そして遂に最後にその附近を通つた船に便乗して歸國する迄のこの島での生活ぶりは蓋し興味の深いものですがあまりながくなりますからロビンソン漂流奇譚の一節はこれで終りさ致します。あゝはBulthuis 氏のエス譯で御覽下さいこの次は又別の話を講義する事に致します。

[Anoncisto] 吉野先生のエスペラント講座は終りました。J-E-I. J-E-I.



# アカシアの花

栗飯原 晋

## 3. キネマ俳優志願

数年前の話である。眉目秀麗なる青年が、ハンガリア首府 Budapest の映画撮影所を訪づれた。彼は Esperanto のみしか話さない。その養父の書いたと稱する手紙には、ハンガリア語で、此の青年の實父は既に故人になつてゐるが、彼の遺志に依り、たゞ Esperanto のみで秘密に教育したと云ふ様なことが書いてある。青年はブダペスト警察署に引渡され警察官に依頼を受けて来た Esperantisto 達が種々取調べた。最初彼は Esp. 丈で流暢に喋つてゐたが、翌日になるとハンガリア語を喋ることを自白した。一方筆蹟鑑定の結果養父の書いたといふ手紙も此の青年が書いたものと判明し、遂に此の男はブダペストの或る仕立屋に見習奉公をしてゐる青年で両親も同市に健在してゐるが、たゞ映画俳優になり度い一念の狂言と判つた。念の入つた狂言である。

## 4. クレイン老人

サミデアーノ秋田雨雀氏等と共にロシア革命十週年記念祭に参加した尾瀬敬止氏の筆をかりて、これもオーストリアから馳せ加はつたサミデアーノのクレイン老人を偲ぼう。

『クレイン老人は徹底的のエスペランチストであるが故に、決して自國と他國との區別などを立てず、誰にでもニコニコしながら交際する。これは一つには未だ獨身であるといふことが彼をして而く樂天的にしたのかも判らない。兎に角眼中に國境なしと言つた所があつて、何人とも親しくし、何人の世話でも焼き、しかも悔ゆることが無いやうだ。若し誰かが彼の顔を寫生し、その出來榮が甚だ良くなかつたにしても、この寫生畫にサインを乞ふと、クレイン老人は一つ返事でペンを握る。四五日前などは、或る驛から我々の列車にイギリスの労働代表者一行が乗り込んだとあつて、その内の一エスペランチストを我がエスペランチスト秋田君のクペーまでわざわざ連れて來た。萬事さういふ風なので少くとも我々一行の者は彼に「ドクトル・エスペラント」の稱號を與へ、彼も亦それを名譽としてゐるのである。』（新愛知新聞所載『國際的文化列車』より）

『私が紅茶を呑んでゐると、そこへクレイン老人もよたよたし乍らやつて來た。この老人はオーストリア人で、年はもう大分取つてゐるらしいが、然しなかなか元氣であつた。頭はうしろの方までツルリと禿げてゐるが、からだは未だぶくぶくしてゐて、どこかに脂切つたやうなところがある。そして肌は乳色を呈してゐるので、處女のそれを思はせさへする。……彼は國語の外にはエスペラントと僅かばかりの英語しか話せない。しかし、その國際語はかなりの堪能らしいので、我々は「エスペラント博士」なる稱號をこの愉快な老人に奉つてゐたのである。するとクレイン老人は、「日本人は親切だ」と英語で話した。それから、極眞面目くさつた顔付をして、

「日本語にはココロといふ字があるでせう。しかし、エスペラントではコーロと言ひますよ」と説明するかと思ふと、今度は自分の前に置いてあるバターの皿を指して、

「日本人の心、はこのバターのやうにデリケートです」とも説明した。

クレイン老人は、萬事がさういふ風で、自分の話相手さへ見つければ立ちどころに諧謔を言つた。』

（時事新報所載『黒海旅想』より）

## 5. 信夫淳平博士

現代に於ける最も秀でたる外交評論家信夫淳平博士（萬朝報社長）は、その名著『外政監督と外交機關』の中で『勿論佛語の外交用語であるのは畢竟外交界の慣例に過ぎないので敢て國際上の成規といふ次第ではない。随つて例へば、將來或種の國際用語でも出來れば例へばエスペラント語でも大いに發達し、其の利用が充分に行はれるやうになれば、之を外交上にも用ゆること理に於て申分はない。度量衡に於ける米突制の如く、將た萬國信號の如く、エスペラントが世界の識者の間に共通的に沿く使用せられるやうになると、外交社會にも無論利用せらるゝに至るなしとも限らない。』（p. 549）と論じてゐる。信夫博士の主宰せらるゝ萬朝報に Esp. 欄が新設されたのはうれしいことである。



# TURMENTAJ DEMANDOJ

【惱 ま し き 質 問】

JULIO BAGHY 原 作

川 崎 直 一 譯 註

“Patrinjo, ĉu vidas mi veron, ne fablon?  
De kie vi prenis kovrita la tablon?  
Hieraŭ pro l' frosto bluis la mano,  
Piedo tremadis en trua sandal',  
sur tablo de l' hejmo mankis eĉ pano,  
ni sidis malsataj sen ia regal' ....  
Hodiaŭ vi ŝanĝis mian ĉifonon.  
Mi pompas en novaj lakŝuoj, silkvest',  
sur tablo mi vidas supon, kaponon,  
kaj logas frandaĵo min—kiel dum fest'! ....  
Patrinjo, ho diru, ĉar mi ne komprenas,  
de kie ĉi tiu feliĉo nun venas?  
Patrinjo, tre strange, sed kvazaŭ en dormo,  
mi vin ne rekonas en la nuna formo ....  
Hieraŭ vi estis multe pli bela:  
brunhara kaj pala kun ĉarma ridet'.  
Rigard' de l'okuloj—mildo ĉiela—  
karegis min ame, konsolis kun pet' ....  
Hodiaŭ la brunaj lukloj jam flavas,  
la vangojn fremdigas ŝminkita purpur',  
sub viaj okuloj ombron vi havas,  
parfumon odoras la vest' el velur' ....  
Patrin'! Patrinet'!! Mia koro doloras ....  
Ah! Panjo amata, nun kial vi ploras?”

『母さん、私が見ているのはほんこの  
事でしょうか、お話しじゃないのでし  
ょうか？』

どこからあなたはこの飾られたテー  
ブルを持つて来たんです？

昨日は寒さの爲に手は青く

足は穴のあいた草履をつけたまゝ、ふ  
るえていました。

うちのテーブルの上にはパンさえも  
無く、

何らの御馳走も無しに皆んなはお腹  
をへらして座っていました。

今日はあなたは私のボロ着物をさ  
かえました。

私は新しい漆靴をはき、絹の着物を  
着て美しくかがやいています。

テーブルの上にはスープも雞ものつ  
ています。

そして御馳走は——丁度お祭りの時  
のように——私を誘っています！

母さん！どうか言つて下さい、私に  
はこんな幸福がどこから今来ているの  
か解りません。

母さん！大變な具合で、夢の中の  
ようで、私には今のお姿ではあなただ  
とは思われません。

昨日はあなたはもつと奇麗でした。  
栗色の髪と愉快なほゝえみを持つた  
青いお顔。

あなたのまなざしは——それは非常  
におだやかなものでしたが——私をや  
さしくあやしてくださいました又頼む  
ように私をなだめて下さいました。

今日は房々とした髪ははや黄色くな  
つています。兩頬は赤紫に色ざられて  
親しみのないものになっています。

あなたのお目の下には影があります。  
ビロードの着物は香水の香がします。

母さん！母さん！私の心は苦しんで  
います。

あゝ！愛する母さん！何故今泣くん  
です。

【註】現存の一流詩人ハンガリーの Baghy  
の詩集 *Preter la Vivo* より。Kadenco は大體  
~~~~~と amfibrako  
(抑揚抑格) 即ち Tagiĝo に同じ。fablo「寓
話」だがこゝでは「お話し」位に軽くさつて
も良い。De kie vi prenis kovrita la tablon=
De kie vi prenis la tablon kiu estas kovrita per
multaj bongustaĵoj kaj ornamaĵoj. kaponon=
kastrita grasigita koko (食用の去勢雞)。Mi
vin ne rekonas en la nuna formo. 直譯：(昨

日と違つて化粧した) 今の姿に於ては私はお
母さんを認める事は出来ない。ŝminki はドイ
ツ語 sich schminken から来たもの。surmeti
ruĝon, kolori la vizaĝon の意だが、一般に使
われていない言葉だから、我々は採用しない
方が良い。purpuro=violruĝa koloro. ŝminkita
purpuro こゝでは「べに」をさした事。

【評】説明的で sentimental だ。もう一歩
踏み出してほしい。

FUNDAMENTA KRESTOMATIO

質 疑

7) Por ĉiu tago mi ricevis kvin frankojn, sed por la hodiaŭa tago mi ricevis duoblan pagon, tio estas, dek frankojn. (p. 3, l. -5) の frankojn はなぜ目的格になつてゐますか前置詞省略の目的格ですか。[横濱 C. I. 氏]

tio estas (略して t. e.) は『即ち』と云ふ意味の挿入句(副詞句)で ...mi ricevis duoblan pagon, t. e. mi ricevis dek frankojn 『二倍の拂ひを貰つた、即ち百フラン貰ひました』の略で動詞 ricevi にかゝる目的語として目的格になつてゐるのです。tio estas はまた nome と云つてもよい。

8) Lia duonpatrino. (p. 12, l. -8)
du'on'patr'ino 「半分母親」これは「繼母(まはゝ)の意です。

9) Mia skribilaro konsistas el inkujo, sablujo, kelke da plumoj... (p. 13, l. 7)

『私の文房具 (skrib'il'ar'o) はインキ壺、砂容れ、ペン數本...から成立つてゐる』

インキで字を書いて吸取紙を用ひるゝ字體が淡くなるのを嫌つて細砂をふりかける人がある。sabl'ujo はその細砂を容れて置くうつはです。

10) Tio ĉi estas ankaŭ mia principo: aŭ akurate, aŭ ne!

(下宿のかみさんが、拂ひはキチンキチンとしてほしいと云へば學生曰く)『それは(即ちキチンキチンとやること)また僕の主義なんですよ: キチンキチン (akurate) と拂ふか全然拂はぬか (tute ne)』(拂ふにしても拂はぬにしても正にキチンキチン)

aŭ ~, aŭ ... ~であるか、或は...であるか(だ)。

11) Kiel vi volas; pro viaj kelkaj centimoj mi al vi piedon ne rompos. (p. 80, l. -6)

(紳士が、乞食におれは片輪でない者には施をしないあつちへ行けと云へば乞食)『そんなら参ります。(あなたの欲する如く行きます); あなたが二三サンチーム下さるからと云つて自分で自分の脚を折るのは眞平だ

(金をもらふためにわざわざ片輪になるものか)』。

rompi al mi piedon = rompi mian piedon.
自分で自分の脚をへし折る。

12) Mi multajn fojojn prezentadis vian personon, kaj ĉiam kun tiu ĉi vizaĝo, kiun mi nun havas. (p. 82, l. 9)

(Napoleono III が大使 Benedetti をからかつて牛面と呼んでゐた。大使曰く)『私奴は度々陛下の代理を相ひつとめました(あなたの御人物をつとめた)が、いつも此の持ち合せの面相でござりまする』

prezenti (人の目前に)提示して見せる、(芝居などを)演出する。

homo (bestoj に對して) 人、人間。

persono (あゝ云ふ) 人、(こう云ふ) 御仁、(その人さなりの)人物。

prezenti vian personon. (あなたの人物を演出する)代表する。

13) La diablo prenu tian ordon! (p. 85, l. -9)

『何てべら棒な抜けやりだ!』

La diablo prenu ~on. 惡魔が~をさらつてしまへ、おゝいやな~だ。(さいやなものに對してのゝしる言葉) 例:

La diablo prenu tiun virinaĉon!

けしからねえあまつちよだ。

Diablo min prenu!

あゝわれ乍ら愛憎がつきた、困つた。

ordo (物の)順序、(物事にキチンと順序が立つた)秩序、(キチンと片附いてゐる)整頓、キチンとしてゐる。

上例は『こんな ordo は惡魔にさらはれてしまへ』即ちすべて何でもがキチンとして居らず、なげやりになつてゐるのを罵つた言葉。

14) Kion unu ne sciis, tion plenigis la alia. (p. 86, l. 13)

(學者だちが集まつて色々討論をやる、その中の)『一人が知らぬ所は他の者が之を補足

した(缺けたるを plen'igi 充した)』

15) leŭtenanto de la maristaro. (p. 88, l. 13)

『海軍大尉』leŭtenanto は陸軍では中尉、少尉、海軍では大尉。mar'ist'aro 海軍。

16) En vespero de la tria tago antaŭ la komenciĝo de la hotela tagmanĝo aperis en la hotelo kvara gasto に於て en vespero とあるのに tagmanĝo とはさう云ふわけですか (p. 89, l. -18)

歐洲大陸では今日では晝食は午後一時か二時、夕食は七時か八時、即ちだいぶ日本風になりましたが、昔は殊に上流はだいぶちがつてゐました。可成り寢坊をして、多く寢室で unua matenmanĝo (お茶と paneto 位)、晝頃 dua matenmanĝo、午後おそく tagmanĝo、夜ふけて vespermanĝo をさつたものです。即ちそのころの tagmanĝo は殆んど vespere です。なほ今日でも國によつて食事の呼び方がちがひます。例へば佛國では朝起きぬけのが petit déjeuner 又は premier déjeuner (matenmanĝeto aŭ unua matenmanĝo)、晝のが déjeuner; 英國では breakfast が matenmanĝo, lunch が tagmanĝo, dinner が vespermanĝo, supper が dua vespermanĝo で dinner と云へば varmaj manĝaĵoj, supper と云へば malvarmaj manĝaĵoj を意味します。

17) (La ŝipo) portas sur la rando la surskribon „Santa Mario“. (p. 92, l. 6) の rando は船腹と見るべきですか船首ですか。

『船べり』です。

18) Travivi tion, kion li travivis penante pri la efektivigo de siaj planoj—estis jam tro multe; sed esti sur la vojo al ilia efektivigo, trairi naŭ dekonojn de tiu ĉi vojo kaj ekiri returnen, nenion farinte—tio ĉi estis tro multe eĉ por liaj fortoj! Tio ĉi estis neaŭdita, nekredebla moko de la sorto, tio ĉi estis bato, kiu estis kapabla rompi eĉ lin! (p. 94, l. 12)

『彼(コロムブス)が自分の計畫實現に努力してすごし來つた(tra'vivis)そのことを経験する—それはもうそれだけで(jam)過酷(多すぎる tro multe)である; 然しその計畫の(ilia)實現の途にのぼり(esti sur la vojo), そ

の途の十分の九を通過して(tra'iri), 無爲にして(nenion farinte)歸途につく(ek'iri re'turn'en)—これは彼の(様な強い人)の力にとつても過酷である。これは未聞の(ne'aŭd'ita)考も及ばぬ(信じられぬ ne'kred'ebila)運命の嘲弄である、これは彼(みたいな人)をさへもひし挫くに足る(kapabla)打撃である。

Koncerne al la lingva respondo 3 (Aprila n-ro, p. 119), T. Jasuda:—„Fine ŝi ne povis pli elteni—sed neniu pli ol tiu,....“. Laŭ via klasigo, ŝajnas al mi, vi pensas: „neniu pli ol tiu = neniu fratino sciigis pli multe ol tiu fratino, al kiu rakontis ĝin la plej juna reĝidino“. Sed mi pensas, ke tiu ĉi „pli“ estas uzata en la senco de „plu“, ekzemple „Fine ŝi ne povis pli elteni“ = „plu elteni“. Laŭ mia opinio „je vorto de honoro“ devas esti komprenata en la sekvanta maniero: La plej juna reĝidino rakontis pri siaj doloroj al unu el siaj fratinoj, kiu promesis, ke ŝi rakontos pri tio al neniu. Sed spite tiu ĉi promeso tiu fratino rakontis al ĉiuj siaj aliaj fratinoj, kaj baldaŭ tiam sciigis ankaŭ kelkaj aliaj virinoj, sed je vorto de honoro (t. e. oficiale, aŭ je vorto de sankta promeso) neniu pli ol tiu (= neniu alia homo ol tiu fratino, t. e. neniu plu) sciigis (almenaŭ laŭ la ŝajno).

Respondo:—Kiel vi opinias, „pli“ estas kelkfoje uzata en la senco de „plu“ ĉar „pli“ = „pli multe“ povas iaokaze tre bone signifi la sencon „plu“ = „pli longe“. Ekzemple, „ŝi ne povis pli multe elteni“ = „pli longe elteni“. Sed volu noti, ke frazo „je la vorto de honoro“ (ankaŭ ofte „honorvorton“) estas uzata kiel, tiel nomata „absoluta adverba frazo“ en la senco: „kredu al mi; mi ja diras la veron; en vereco“, kiel oni ofte renkontas en Fundamenta Krestomatio kaj aliaj verkoj. Se kiel vi opinias, la frazo „neniu pli ol tiu“ signifus: „neniu alia ol tiu fratino“, tiam estus tre malfacile klarigi, kion signifas la tuj sekvanta frazo: „kaj kelkaj aliaj virinetoj de maro.“ Ĉar la uzo de frazo: „je la vorto de honoro“ en la senco „kredu al mi“ estas tute kutima, kaj estus iom nekutime kompreni sub tio: „konforme al la honora promeso (almenaŭ ŝajne sin trovis neniu krom tiu fratino).“

他 山 の 石

47. 始めからそうするつもりでしたのではない。

Mi ne faris tion **propravole**.

48. ポケットをさぐって銀貨を取り出した。

Li serĉofosis en la poŝo kaj elprenis arĝentan moneron.

49. どうぞおかまひ下さりますな。

Ne faru al vi klopodojn (por mi) = Ne ĝenu vin (tro multe por mi).

50. ちかぢか御目にかゝつて申し上げたいことがあるのです。

Mi havas ion paroli kun li **persone**.

51. あれやさつきの人ぢやないか。

Ĉu tio ne estas la homo de **antaŭe**?

比較:

さつき御話の本はどれです。

Kiu estas la libro, pri kiu vi ĵus parolis?

52. 百圓出せつて? ヘンそうは問屋が卸さねえ。

Ĉu mi donu al vi 100 enojn?

Mendu-atendu!

53. どうしていゝか面喰つた。

Mi ne sciis, kiel min aranĝi.

〔註〕 Mi ne sciis, kion fari 又は kiel agi としても勿論よい。aranĝi sin は身の處置をする意。

Li aranĝas sin kvazaŭ senpekulo.

悪いことをした癖に口を拭いてすましてゐる。

Li aranĝis strangan fizionomion.

奴キテレツな顔をした。

Li aranĝis (faris) gajan mienon.

人を馬鹿にした(フツン面白いな)と云ふような顔をした。

54. 今度はちゃんと實證を握つてゐるから君を合點させることが出来るぞ。

Mi nun **havas en la mano** la fakton, per kiu mi povos vin plene konvinki.

55. 君はあの一件のことをまだ根に持つてゐるのか。

Ĉu vi ankoraŭ havas **resenton** de la afero?

〔註〕 resento (一度受けた感情を) また再び感じるこゝ, (前にうけたことをまだ根にもつてゐる) うらみ。

Ĉu vi havas ankoraŭ ion sur la koro pri tiu afero? と云つてもよい。

56. そんなけしからんことをしたのなら奴は紳士ぢやない。

Oni ne povas lin nomi sinjoro, se li faris tian **malĉonvenajn**.

57. この好機會を手放してなるものか。

Mi neniel povas ellasi el la manoj tiun ĉi bonan okazon.

〔註〕 簡單には Mi neniel povas preterlasi tiun ĉi bonan okazon.

58. 闇に乗じて軍隊は河を渡つた。

Profitante de la mallumo la armeo transvadis la riveron.

59. あとはまた此の次に(他日)お話しすることに致しませう。

Mi rakontos plue **alian fojon**.

60. あの時あの人の處へ助力を願ひに行こうと云ふようなことは思ひも浮ばなかつた。

Ne venis tiam al mi en la kapon turni min al li por la helpo.

61. もう駄目だ、仕方がない。

Nenio jam helpas.

仕方がない、おれの知つたこつちやない。

Mi ne povas helpi al tio.

62. 此の御恩の程は忘れませぬ。

Mi ne forgesos tiun ĉi ŝuldigan faron (kiun vi montris al mi)

63. せめて此の事だけは叶へて下さい。

Donu al mi almenaŭ tiun favoron!

64. 親のかたきをとる? そんなことアもう今時ははやらない。

Venĝi la patron? La modo pri tio pasis jam de longe.

65. 彼は一と晩待ちほけをくらし居つた。

Li lasis min atedi la tutan nokton.

66. 彼はへべれけによつぱらつて熟柿くさいいきをふいてゐた。

Li estis ekstreme (preskaŭ senkonscie; terure; ĝisfunde) ebria kaj malbonodoris vinon per lia tuta buŝo.

[註] per la tuta buŝo 口ぢう。

類例: Mi amegas vin per mia tuta koro. 心をさゝげて熱愛してゐるのです。

Li tremis per la tuta korpo kiel aŭtuna folio.

まるで秋の木の葉のように全身をわなわなふるはせてゐた。

67. 彼女はまつさかさまに川にとび込んだ。

Ŝi ĵetis sin en la riveron, la kapon antaŭen.

[註] la kapon antaŭen = kun la kapo antaŭen.

類例: 彼は英語が讀めないんだらう、何しろ新聞をさかさまに持つてゐたから。

Tre povas esti, ke li ne komprenas en angla lingvo, ĉar li tenis la ĵurnalon, la supron malsupren (= kun la supro malsupren).

オイ君羽織を裏かへしに着てるぜ。

He, vi portas la superkimonon kun la interna flanko eksteren.

[注意] 此の用法は謂はゞ全體で一つの副詞句の用をなしてゐる(副詞句)。そして副詞的に軽く用ひるために形を簡略にして用ひられる。

Ili promenis mano en mano (= kun la mano en la mano).

手に手をとつて散歩した。

Ili renkontiĝis subite vizaĝo kontraŭ vizaĝo (= kun la vizaĝo kontraŭ la vizaĝo).

一と口噺

En la klaso de gramatiko, la instruistino klarigas:—Ekzemple, kiam oni diras: „Mi estis bela“, tio estas la estinteco. Kio estas, se mi diras: „Mi estas bela“?

Knabo:—Tio estas la malvero!

文法の時間に女の先生説明をする: 一例へば『私は美しかつた』と云へばそれは過去です。若し『私は美しくございます』と云へば何ですか。

生徒:—それは嘘です。

A:—Ĉu vi vidis, veturante per subtera vagono, akvon fluanta laŭlonge sur ambaŭ flankoj de l' vojo?

B:—Mi ĝin ne vidis, ĉar mi veturis vespere.

甲『地下鐵道に乗つて、兩側に水の流れてゐるのを見て來たか』

乙『僕は夜乗つたから見えなかつたよ』

和文エス 譯添削欄

【第七回】

編輯部

問 1. 火がなくてはわらでも燃えない。

答 1. Sen fajro ne brulas eĉ pajlo.

これは皆さん好成績でした。中に Neniam ekbruliĝas eĉ pajlo, kie ne ekzistas fajro. と譯した人がありました。これでも間違つては居ません意味も立派に通ります。たゞうまい譯とはいへぬだけです。同じ意味の事をいふのにいるんないひ方があるのですから各自分の力に應じてまづ大體の意味がちがはないうにいい表す事につとめればなりません。それが出来れば成功の第一歩です。題を見てこれはむづかしさうだからと思つて止してしまふのは上達の行きどまりです。後で答を見るにしても一度自分が苦心してやつて見たものとさうでないのとはおぼえ方がちがふものです。蛇足かもしれませんが今度は答案が少かつたのでこれだけつけ加へて置きます。

問 2. 私の友達の中にはそんな男はゐません。

答 2. Tia homo ne estas inter miaj amikoj.

ne estas は sin ne trovas でも ne troviĝas でもいいのです。inter の代りに en を用ひた人がありましたが en ではいけません。inter は二者の中間に在りまたは多數者の間に交るの意でこゝでは第二の場合です。en が(…の中に)の意味に用ひられる場合は場所及び物の中に在るの意です。例へば en la ĉambro, en la botelo 等々。

問 3. マリは鳥のやうに高く飛びました。

答 3. La pilko flugis alte supren simile al birdo.

飛ぶはマリだから salti とやつてもよさうですがこゝでは鳥のやうにさあるから flugi

を用ひた方がよいのです。supren の代りに en la aeron としてもいいのです。simile al の代りに kiel をつかつた人が多數でした。それでもいいのです。supre と super とまちがへた様なつかひ方をした人がありました。字の形は似てゐるし意味も相通するものがありますが supre は副詞 super は前置詞で使ひ方はまるでちがふのですからよく氣をつけて下さい。

問 4. 本と首びきで一晩中坐つてゐた。

答 4. Mi sidis tutan nokton super la libro.

sidadis と書いた人が大部分でしたが sidi は動作を表すのでなく坐つてゐるさういふ状態を表す動詞だから、久しく坐つてゐたとしても sidis でいいと思ひます。tutan nokton の代りに en la daŭro de tuta nokto, dum tuta nokto 又は tra tuta nokto を用ひてもよいと思ひます。sidi super はこゝでは…の上で働いてゐるの意です。他の例一つ二つ。

1. La trompantoj laboradis super la malplenaj teksiloj. かたりごもはからの機で働きつづけた。

2. Li ŝvitas ankoraŭ super la alfabeto. 彼はまだアルファベットで汗を流してゐる。

問 5. 其の後私は私が引受けませう。

答 5. Tiun rolon mi prenos sur min.

preni sur sin といふやうな語句はそのまゝ記憶して置く方が便利です。他の例一つ Tio ĉi estis feino, kiu prenis sur sin la formon de malriĉa vilaĝa virino. mi prenos といふ所を mi prenu としてもいいのです。自分に命令を下す事は直接的に意志を表す事になる

ので強く聞こえます。しかし普通には人にむかつていふ場合には *mi prenos* といふ方がいゝやうです。

問 6. 前も後もはてしなき青海原。

答 6. *Antaŭ ni kaj post ni, ni vidas nur senliman bluan maron.*
(*sin etendas senlima blua maro.*)

antaŭ kaj post (又は *malantaŭ*) と書いた人がありました。前置詞だけ使つたのでは意味をなしません。*antaŭe kaj malantaŭe* とすればいゝのです。*mara ebenajo* とか *markampo* とか書いた人がありますがたゞ *maro* とした方がいゝのです。

問 7. 零下 30 度。

答 7. *La 30-a grado sub la nulo.*

30an gradon と目的格にした人がありました。文の中にはいる時には目的格になる事もありませうがたゞ零下 30 度といふだけには目的格はいりません。下の方へ數へるといふ意味で *malsupren* といふ語をつけた人がありますが寒暖計の目もりのしかたがその不必要を示してゐます。ついでにいつて置きますが零點から上をいふ場合で特に零度以上といふ必要がある時には *super la nulo* といひます。

問 8. 私はそれをこなごなに打ちくだいた。

答 8. *Mi disbatis ĝin je mil pecetoj.*

disbati の代りに *frakasi* はいゝが *rompi* では弱いと思ひます。*ĝi* を *tio* とした人がありますが打ちこわしたといふ物の代名詞としては *ĝi* の方がいゝと思ひます。この場合 *mil* はたゞ多數といふ意味に用ひたのです。

問 9. 彼女は私から數歩の所に立つてゐました。

答 9. *Ŝi staris je kelke da paŝoj de mi.*

je をとつて *kelkajn paŝojn* としてもいゝのです。*en la distanco de kelke da paŝoj de mi* でもいゝのです。

問 10. 出發する前に彼は何もかも賣り拂つた。

答 10. *Antaŭ sia foriro li ĉion forvendis.*

Li ĉion forvendis, antaŭ ol li foriris.

どちらでもよろしい。*ĉion* を *ĉiun sian havaĵon* とした人がありますが簡単に *ĉion* で結構です。*antaŭ ol lia forveturo* はいけません *antaŭ ol si forveturis* もいけません。第一の場合は *antaŭ* は前置詞で全體が一單文ですから再歸を用ひねばならぬし、第二の場合は *li foriris* と *li forvendis* との二つの文が結合して複文になり *antaŭ ol* は接續詞になるのです。再歸代名詞 *si* は一單文中主語となつたものが再び出る場合にのみ用ひるのです。

課 題

1. この家は煉瓦で出来てゐる。
2. 其の小説はエスペラントに譯されてゐます。
3. 大きな音をさせて戸をあけた。
4. キャベツのスープの臭がする。
5. みんなにこびるものはたれにもすかれぬ。
6. それには我々はとうにもがまんが出来なかつた。
7. ごらんの通りこゝには私の外にはたれもゐないのです。
8. お前は立ぎゝをするくせがある。
9. 其事を思ひ出す度にすべてはいきいきと目の前に表はれる。
10. たちどころに私の病氣がなほる様な薬はないものでせうか。

地球の兒等の集ひ

—萬國大會の盛況—

小坂 狷 二

七月二十七日。長谷川とベルリンの北の Stettiner Bhf (停車場) へゆく。土岐氏も来る。十三時 Rudolf Mosse 社主催の萬國大會行 karavano は Ellersiek に率ゐられて出發。Schwinemünde 港で後發の Blenkenheim の率ゐる karavano と合して舟に乗る。乗り込む時検査官が旅券に査證がないと文句を云つてあさましにされる。長谷川例によつて疳癪玉を破裂させて Wir japaner brauchen keine Beglaubigung! (日本人には査證はいらないんだ) と吠え無事通過。一行百數十名、轎上には高く緑星旗が翻り、天候また平穩。まことに愉快である。Prof. Einstein の従弟だと云ふ S-ro Einstein と同じ kajuto の寢臺にれる。長谷川と土岐君とは申込みがおくれたので寢臺がなく、ferdekaj seĝoj の上にれる。それも seĝoj の分配が遅くなつたので長谷川 Ellersiek に喰つてかゝる。

二十八日。美しい朝。八時半船は自由市 Danzig の門戸で有名な banloko (海水浴場) たる Zoppot の棧橋につく。形式だけの税關検査があり、荷物を車につませてゾロゾロ歩いて停車場へゆく。路は可成り遠く且つ熱い。その上吾々の荷物が遅れたので本隊は先へ立つてしまふ。それに車を引いて來た portisto がぼるので長谷川フンガイする。四等車へ押し込まれて約一時間で Danzig 着。一列車遅れたので停車場前廣場のエスベラント歓迎門に緑星旗が徒らにひるがへるのみで誰も出迎へがなく、どこへ行つてよいやらわからない。長谷川再びフンガイ。やつとエスベランチストの青年を見つけ、長谷川と吾輩は Hotel Central, 土岐君は Danziger Hof へ宿舍が割り當てあるとわかる。先づホテルへ行つて荷物を置き、直ちに Kongresejo たる Schüttenhaus (Pafista Domo) へゆき、會員番號を云つて大きな koverto に入つた大會會員證其他大會一件書類を受け取る。瀬川君に出あふ。食堂で晝食をしてゐたら淺田教授が奥さんを入つて來られた。日本黨が多數になつて氣勢が舉る。午後市内見物がある筈だが何時からかわからない。何でももう出發してしまつたらしい。長谷川三度フンガイに及ぶ。やつと一行に追つて市内見物。大きな町ではない

のだからゾロゾロ歩く。ベルリンの Antaŭkongreso では Glück が戦争できたへた大聲で konduki したので甚だ要領を得たが、此處では數百人がゾロゾロ歩かせられただけで説明などは聞きされない。何分にも Danzig には萬國大會は少し荷が勝ちすぎたさ云ふのが一般の定評であつた。Programo なども前に發表してあるものは殆んど變更されてゐて毎日新聞 (Danziger Neueste Nachrichten) と云ふ新聞が毎日一頁エスベラントで大會報道や他の記事をのせる) を讀まなければならない。色んな會合場の建物名はエスベラントで出てゐるが貰つた案内地圖は獨逸語で書いてあるのでそれがどれに當るかわからない。萬事此の調子で氣がきかぬことおびたゞしい。歩いてゐる内に一青年があなたに是非紹介してくれさせがまれてゐるからと二十歳位のかわいらしい娘さんを紹介してくれた。F-ino Dorothea Wegener と云つて大會前にエスベラントを始めたばかりだそうだが中々熱心である。この Dora さん大會中いつも一緒に居たので若い連中からお前は japanino になるのかいなどとからかはれてゐた。

夕 Schüttenhaus で Interkonatiga vespero あり、裏の大きな庭園で danco や音樂などの amuza prezentado があつた。大石氏が來てゐた。

萬國大會の一般公の記事は本誌にも一寸書かれたし又他の外國雜誌にも出てゐることだから單に吾々の目にうつつた側面觀と云つたようなものを書くことにする。

二十九日。電車で Teknika Altlernejo (工科大学に當る學校) にゆく。大會員は市内の電車は只乗りが出来る。少し遅れて行つたので發會式には間に合はなかつた。Behrendt の Telefonkablo por granda distanco と云ふ講義を聞く。『遠距離電信』に ferntelegrafio と云ふ neologismo を proponi したので一同恐縮する。次に Stuttgart の D-ro Vogt の Unuecigo de monsisistemo の講義を聞く、前に本誌の「つみ菜集」に書いたように無茶な發音なので今度は一同あきれかへる。

午後 K. R. 即ち常設代表者團 (Konstanta Reprezentantaro de Esp. Societoj) の會議に

出席。日本の第一期の K. R. であつた關係で現 K. R. の進藤靜太郎君の代理として顔を出した。Privat が議長で Nylen, Isbrüker 夫人など錚々たる連中十數名出席。開頭しきりに我輩の方を氣にし乍ら『先づ第一に日本の samideanoj からの抗議を議さなければならぬ』と kasisto の Schoofs が口を切る。はて何事かと思ふとそれは1925年の夏進藤君から出した抗議『(1) KRの會計を公開せよ (2) 國際聯盟に對する宣傳などに大切な金を浪費せず Lingvaj Institucioj に金を出せ (3) landonoma sufikso -i- を固執してゐるけしからぬ UEA をやつつけろ (4) KR が會計を明示せぬ限り日本エスペラント學會は賦課金を會員數に對する全額を支拂つてやらぬ』と云ふだいぶ痛い詰問である。本年は未だ日本エスペラント學會から賦課金が來ない、多分此の抗議の結末がついてゐない爲めではあるまいかと Schoofs が云ふ。『そんな爲めではなく最近日本は malbona tempo de finaco で suferi してゐるため送金が遅れたのであらう』と答へてやる。それでも Privat はしきりに氣にして (1) 此の抗議は舊組織時代に來たので現在の吾々は責任がない、今は KR の會計は公示することにしてゐる (2) 此の抗議が來て二ヶ月たつか立たぬかに例の萬國電信會議での大成效があつたので徒勞ではない (3) UEA はもう最近 landonoma sufikso -i- の使用はやめた』と辯明大につとめる。此の中 (3) は UEA が Germanio などは sufikso -i- をつけたのではなく、internacia vorto として用ひるのだと詭辯を弄してゐるのを云つたのは明かであるが、これは他日さつちめる材料にするためいたく感心した様な顔をして置く。なほ Schoofs が此の様にすべて日本の申出を容れたのだからどうぞ金を送つてくれるように頼むと本音をふく。次に一般の議事に入る。最も面倒な問題は例の Wien 萬國大會缺損問題。これは Wien 萬國大會で金を使ひすぎて大缺損が出來、そのため Wien の大會主催者は財産の差押を喰ひ家具をのこらす競賣に附せられ、なほ借金のお山を背はされてゐる。これは全世界のエスペランチストが等しく負擔すべきものであるから一種のエスペラント税を定め各國のエスペランチスト全體から金を取り立てて此のあはれむべき犠牲者を救へと云ふ提案である。KR 賦課金として會員一人につき毎年十錢宛取られる。(日本は在來千人分の百圓しか年々出して居らぬ

が) のは各國の會としては可成りな負擔であるが、然し esperantismo の手前反對もならず、痛し痒しで煮え切らぬ事を云ひ合つてゐたがオランダの Isbrüker 夫人が先づ敢然反對をとなへ出したので、一同急に勇敢になつて反對を始め否決することにし、その代り大會中及び各國に對して自由寄附金をつのつてやること云ふことにきまる。Privat 曰く KR の會議を公開せよとよく人が非難するが傍聴があつては今のような打ち開けた議論が出來ない、矢張り秘密會にして置いて公にはあたりさはりのない議論や報告の公開會議をやるがよいと taktikisto の本領を遺憾なく發揮する。

二十一時 Schüttenhaus (Pafista Domo) の salonego で大會發會式が開かれる。I C K (Internacia Centra Komitato) の名で Isbrüker 夫人が開會を宣し、會頭副會頭の指名をする(御年順で大石氏に日本側としての副會頭になつてもらつた)。大會々頭 Aeltermann の挨拶、Privat の演説其他の挨拶あり。次で各國代表の挨拶。エスペラントとその國語で挨拶しるこの事で我が長谷川が蠻聲をはりあげてやる。Hasegaŭa は日本語ださ吃るがエスペラントは流暢なものださ大評判になる二十三時モツアルトの Fratoj, manon donu kore (Z 博士譯) を合唱して散解。

三十日(土曜)。朝九時から、當自由市 senato の prezidanto の KR 接見式ありれむいのを引つぱり出される。電車で Teknika Altlernejo の Somera Universitato にゆく。十一時十分から同校内で Unua Laborkunsido あり。Privat 司會。D-ro Dietterle の報告、Morris 夫人の挨拶あり。Morris 夫人は息子さんをつれてアメリカから來たのだ。例の秘書の Johns 嬢も來てゐた。なほアメリカからはおなじみの Marootian や宣傳部長の Hamman 氏が來てゐる。Dietterle の例の世界統計によると 3117 の會で返事をよこしたのは 1246 に過ぎぬ不成績、それによると會に入つてゐるエスペランチスト 36,000 人、獨立のエスペランチスト 8,600 人。然しなほ 60,000 人位の izolitaj esperantistoj はあるだろうから全世界のエスペランチストの實數は約十萬人と云ふことになる。調査が不充分のこと故三四十萬は居ることと思ふ。然し日本の宣傳家が唱へる『驚く勿れ全世界のエスペランチストたつた二百萬人』はちと實數と桁がちがふようだ。

つ み 菜 集

7. S-ino K. Ossaka

こう云ふ題を掲げたからさて愚妻ののろけを書くのかなどと早合點をしては困る……

歐洲人でも英國人その他の民族までは氣風習慣が随分異なるものだ。英國人は所謂彼等の *gentlemeneco* から萬事乙にすまして吾々みたいなザツクパランの手合からみるさ一寸つきがわるい。そこへゆくスラヴ人はまことにしたしみ易くて氣樂でいゝ。

ホテルへ訪問すれば自分の部屋、即ち寢室で *akcepti* して平氣な顔をしてゐる。自分の妻君のことは *mia edzino* と云ふし、こつちからも *Koran saluton al via edzino!* (奥さんによろしく) などとやつて差支ない。英國人相手だと中々そう平民的にはゆかない。

大正六七年頃 *Gesinjoroj Brown* と云ふのがやつて來たので電話をかけて浅井惠倫、藤澤親雄君と三人でホテルへかけつけた。ボーイに案内されて部屋へゆくと *Brown* 氏部屋では失禮 *Ni iru al la salono. S-ino Brown tuj sekvos.* と來た。それまで *Dick, Saharev* などスラヴ關係のエスペランチストのみを手かけてゐた吾々悉く面喰つてしまつた。

英國でも米國でも自分の「かゝあ」のことを *S-ino* 何々とするのだからやり切れない。のみならず小坂狷二がその妻光子へ出す手紙にも *S-ino K. Ossaka* と書く。随分妻權無視女權蹂躪の極みと謂ふべし。

米國に行きたての時分には愚妻への手紙に *S-ino M. Ossaka* と書いてゐたが、まあ郷に入つては郷に従へと *S-ino K. Ossaka* と書くことにした。然し歐洲大陸へ行つてみるとさうでないので矢張もその *S-ino M. Ossaka* に逆轉。

獨逸では *S-ino via edzino, S-ro via patro* などとやる。丁度日本の『奥様、お父様』などに當るので日本人には甚だ感じがよい。

序乍ら日本人はよくよく親しくならぬ以上は *S-ro* をつけずには一寸呼べない。歐洲人は少し親しくなるさ、いきなり *Hasegaŭa, Ossaka* と呼ぶ。いかにも親しみがある。

も一つ序乍ら獨逸人の *titolo* 好きは有名だ。例へばベルリンの *Glück* など一寸電話で話をかけてくるのにでも *Ĉu vi estas s-ro doktoro inĝeniero Ossaka?* とくる。こつちもまけない氣になつて *Jes, sinjoro direktoro Glück.* とやる……茲に *direktoro* は新聞記者としての *titolo* ださうである。

8. Testudo Ossaka

Titolo と云へば *SAT* (*Sennacieca Asocio Tutmonda*) の連中はお互に *Kamarado* 誰々と呼び合つてゐる。話をさせられる時 *burgoj esperantistoj* の會では *Estimataj samideanoj* とやるべき處を *laboristoj* の會で話をさせられる時は *Karaj kamaradoj* とやつたものだ。

昔、と云つても大戰前 *Tutmonda Vagabonda Klubo* と云ふ藝術好愛者の會があつたが、その會員連中は互に *testudo* と呼び合つたものだ。 *Testudo Ossaka!* など、随分ふざけたものだ。

日本特産の *aĉuloj* 連中 *azeno Ossaka* などとやつたらごんなものぢや。

9. Mi petas?

話をしてゐる中相手の云ふ事がわからなかつて聞きかへす時、英米人などなら *Mi petas pardonon; pardonon; pardonu* などとやる。

獨逸人は *Mi petas?* が普通である。これは *Bitte?* から來た云ひ方。

こう云ふ風な日常の云ひ方は *Esperanto* としては未だ一定してゐない。各國その習慣でやつてゐる。こう云ふ習慣風習上のことは一朝にしてきまるものでもなく、またきめるべきものでもあるまい。將來交通の發達と *Esperanto* の弘布につれエスペランチスト間の接近によつて習慣が交つて一定してくるに従ひ自然ときまつてくるべきものと思ふ。しかも此の如き國による日常用法の差異はさまで *Esperanto* での相互了解をさまたげるものではないのであるに於ておやである。

HUMILECO

【謙遜】

de Seisensui Ogiwara

tradukis Macue Sasaki.

人は——殊に東洋の儒教教育を受けた人は——人間といふものを萬物の靈長として非常に偉いものと考えてゐる。さういふ自尊心の爲めに、人間が悪い事をしたいと思ふ所を差控へたとしたならば、その自尊心もまんざら役に立たぬものではない。けれども、その爲めに、人間其物の本質が偉いといふことにはならない。人間の素質として悪い事をする傾向があるといふ事は否定出来ない。人間は偉いものといふ怜恃を持たせやうとするから、其事が概念になつて、人間の生活をぐれ位、虚偽の多い、ごまかしのものにしてゐるか解らない。さ云つて、私は既成の道德や習俗を破壊せよと主張するのではないが、所謂「惡」さは何ぞや、といふ根本の觀念から研究する必要があらう。而して、私の考では、人間も亦、禽獸や草木や、此地上に生命を惠まれてゐるすべての生類と同じ地平線にまで立戻つて、偉いさか低いさかいふ概念を措いて、一樣に、その生命の交響を感じる心に住したい。其上で、人間に特有な愛や、意操や、叡智が輝き出たならば、其こそ本當に人間的なものとして、尊重し、發育せしめたいのである。

人間は自分の同類に對して自分を卑くする事を謙遜と稱して、一つの道德と認めてゐるが、其は往々處世法の一種に過ぎぬ場合もある。神の目から見れば、人間は禽獸に對してさへも特殊の高慢を感じない心になつて、はじめて謙遜といふべきではないか、と思はれる。

Multaj homoj, speciale tiuj edukitaj en orienta Konfucianismo, tak-sas la homon la plej granda estaĵo, la estro de ĉiuj kreitaĵoj. Se pro tia memrespektado iam oni sin detenus de malbona agado, tiu memrespektado estas ne tute senutila. Tamen tio tute ne pruvas ke la originala naturo de homo estas granda. Oni ne povas nei ke la homa naturo havas inklinon al malbono. Oni ofte instruas ke homoj havu la fierecon pri sia grandeco, dum tia fiereco fariĝinte lia bazideo, igas ilian vivon falsplena kaj trompoplena senmezuro. Mi tamen ne insistas ke oni detruu ĝisnunajn moralon kaj moron. Sed eble estas necese studi de la fundamenta ideo, kio estas tiel nomata “malbono”? Laŭ mia opinio estas dezirinde ke la homoj ankaŭ sin remetitu sur la saman nivelon kie staras bestoj, kreskaĵoj kaj ĉiuj aliaj surteraj vivantaĵoj, kaj ke forĵetante tian koncepton ke tio estas granda aŭ ĉi tio estas malalta, oni vivu en la koro kiu sentas akordon de ĉiuj vivoj. Kaj se tiam ekbrilos amo, volo, sentimento, aŭ intelekto, propra al la homo, tion oni respektu kaj disvolvigu kiel efektivan proprajon de la homo.

Oni nomas tion humileco ke oni sin humiligas antaŭ sia samspeca kreitaĵo, kaj rigardas ĝin kiel virton. Tia konduto ofte servas kiel oportuna vivrimedo. En la vido de dio, ĉu la homo ne estas versence humila nur tiam kiam li jam ne sentas ian fierecon eĉ kontraŭ bestoj?

unu parto de l' ledο nerimarkeblan breĉeton por spiri kaj por aŭdi eksteran sonon; kaj jen por ion provizi mi alfiksis breteton en la apogilo apud la parto, en kiun mi enigis la kapon. Sur tiu ĉi breteto mi metis akvujojn kaj soldatajn biskvitojn. Ankaŭ mi preparis grandan kaŭĉukan sakon—certe oni facile povas supozi, por kio ĝin uzi. Mi elpensis ankaŭ kelkajn aliajn punktojn, kaj mi aranĝis tiel, ke mi povu kun nenia maloportuno enestadi tie du-tri tagojn. Nome tiu seĝo ŝanĝiĝis en ĉambreton por unu homo.

Kun ĉemizo sur la korpo, mi min enŝovis en la seĝon, tra la malsupra enirtruο, kiun mi aranĝis. Ja strange tie estis,—mallume, malfacile spiri, kiel se mi estus en tombo. Jes, certe tio devis esti tombo, ĉar apenaŭ mi eniris tien, jam estis tute same, kiel se mi estingiĝus for de la homa mondo, kvazaŭ tuŝite per la sorĉista vergo.

Post ne longe senditoj de la firmo alvenis kun granda ŝarĝveturilo por ricevi la seĝaron. Mia lernanto—nur li kaj mi duope loĝis tie—, ilin akceptas. Pri nenio li scias. Kiam ili surmetis mian seĝon en la veturilon, unu el la portistoj ekkriis: He, terure peza!;—tio kvazaŭ min pikis, sed neniu suspektis, ke mi estas en ĝi, ĉar fotelo mem estas ĝenerale tre peza objekto. Baldaŭ skuojn de la veturilo klake mi eksentis kiel ian subkonscian senton.

En la daŭro de l' tuta tempo tre maltrankvila mi restis; sed fine, jam post tiu tagmezo, oni metis mian

fotelon kiel masivan ŝtonegon, en unu el la ĉambroj de la hotelo. Nur poste mi sciigis, ke tio ne estis privata ĉambro, sed tio estis tia, kian oni nomas “*lounge*” (ripozejo), kie oni atendas, legas ĵurnalojn, fumas, kaj tiel diversaj homoj kutime tre ofte envenas kaj eliras.

Mia unua celo de ĉi tiu stranga ago, kiel vi supozeble jam konjektis, estis ŝtelligi, elirante el la seĝo kaj ĉirkaŭvagante en la hotelo, en okazo kiam oni for-estas. Kiu povus ĉe sonĝi, ke homo sin kaŝas interne en la seĝo? Certe stulta afero! Kvazaŭ fantomo iras, mi povus trarabi la ĉambrojn, unu post alia, kaj kiam homoj komencas tumultigi, mi jam estas en mia rifuĝejo tute trankvile, nur prezentante al mi ridindan scenon de ilia malsprita serĉado. Vi eble konas paguron,—unu speco de kraboj, kiu ofte sin trovas sur la marbordo. Ĝi similas al granda araneo. Dum neniu homo estas tie, arogante ĝi rampas tien kaj reen kun grava aspekto de burĝo, kaj se aŭdiĝas homa paŝo, kun fulma rapideco ĝi kuras en la konkon por sin ŝirmi. Elmetante el la konko unu ma'gracian, haroriĉan antaŭpiedon, tiam ĝi ŝajne spionas la malamikon. Mi estis ĝuste tia paguro. Anstataŭ konko, mi posedis rifuĝejon en la formo de seĝo, kaj ne sur la marbordo, sed en la eleganta hotelo mi sencere monie ĉirkaŭrampadis.

Tiu ĉi malnormala projekto mia, pro sia malnormal-eco mem tre bone superruzis ĉiujn la homojn kaj ĝuis kompletan sukceson, tiel ke en la tria tago post mia

alveno en la hotelo, mi jam estis plenuminta laboron de abunda sumo. La minacata, tamen tre plezura emocio, kaŭzata en la momento de la ŝtelo; la neesprimbla ĝojo post unu sukceso; kaj tiu tiklanta sento subaŭskulti al bruantaj hotelanoj, kiuj vane krias tuj antaŭ mia nazo, "jen tien la ŝtelisto!" "Ne ĉi tien, ...". Vera komikaĵo! Per kia mirinda ĉarmo ili amuzis min?

Sed bedaŭrinde mi ne havas tempon por detale pri-skribi la okazintaĵojn, ĉar mi ektrovis tie alian tute strangan amuzajon dek-dudekoble pli plezuran, ol tiu ŝtelludo,...kaj mia konfeso pri la lasta, dekomence estis la ĉefa celo de tiu ĉi letero.

Nu ni revenu iom en mia rakonto ĝis tiam, kiam la seĝo estis metita en la ripozejo de l' hotelo. Kiam mia seĝo alvenis la hotelon, dum kelkaj minutoj la mastro kaj iuj ceteraj provis laŭvice la sidsenton de la seĝo, sed post ilia foriro tie ekregis premanta silento. Nenio aŭdiĝis. Kredeble neniu estas en la ĉambro; tamen pro timo mi ne povis tuj eliri el la seĝo. Kiu povis kuraĝi tiaokaze, ankoraŭ fremda sub nekonataj cirkonstancoj? Terure longan tempon,—kredeble mia situacio nur sentigis min tiel,—mi senmove atentadis pri la ĉirkaŭo, kun ekstrema streĉo de ĉiuj nervoj en la du oreloj, por ne preterlasi ĉe tre malgrandan sonon.

Tiel pasis iom da tempo, kiam pezaj paŝoj ekaŭdiĝis. Laŭŝajne ili venas de la direkto de la koridoro. Ĝi

proksimiĝas, pli kaj pli ĝis kelkaj metroj antaŭ mia seĝo, kie ili ŝanĝiĝas en tre malaltan sonon apenaŭ aŭdeblan,—eble pro la tapiŝo sur la planko. Momenton poste mi aŭdis fortan spiradon de viro. Kvazaŭ ekpikita mi subite streĉiĝas, kiam granda korpo de ĉu-ropano—tiel ŝajnas al mi—sin ĵetas kun bruo sur miajn genuojn kaj balanciĝas. Liaj masivaj sidvangoj apenaŭ kuntusiĝas sur miajn femurojn, apartigite nur per mal-dika leda muro, tra kiu mi ĉe sentas lian varmon. Liaj larĝaj ŝultroj apogiĝas ĝuste kontraŭ mia brusto, kaj ambaŭ pezaj manoj metiĝas sur miaj trans la ledon. La viro fumas verŝajne cigaron,—kies odoro vireca kaj gajplena fluas al mi tra la ledoj.

Estimata sinjorino, bonvolu al vi prezenti tiun scenon, vin lokante en mian situacion. Kia stranga vidaĵo! En la mallumo interne de la seĝo, forte kuntirante la membrojn pro trea timo, kaj kun riveroj da ŝvito malvarma sub la brakoj, mi perdis ĉion en la kapo, tute konfuzita.

Poste en la tago, diversaj homoj, unu post alia, sidiĝis sur miajn ambaŭ genuojn,—ĉiuj same ne povante ekvidi ke mi estis sub ili; ke ili sidas sur la femuroj kun cirkulanta sango de homo nomata mi, kiun ili prenas por mola kuseno. La mondo mallibera, mal-lumega, per ledo ĉirkaŭita.—Kiel ĉarma kaj mistera ĝi estis! La homo, kiun ni kutimis vidi en ordinara mondo, tie ŝajnas esti tute alia animalo. Li konsistas

el voĉo, elspiro,odoro, paŝbruo, susuro de vesto, kaj kelke da karnamasoj elastaj kaj dikaj. El nenio alia. Per la tuŝento ilin mi distingas, anstataŭ per la trajtoj; tra mia haŭto kelkaj porke grasaj sendas senton kiel tion de putrinta fiŝo, dum aliaj donas tion de skeletoj, tion de sekigita melono. Kurbeco de la spino, apartiĝo de la skapoloj, longeco de la brakoj, dikeco de la femuroj, grandeco de la koksizo k. t. p.,—koncerne al ĉiuj ĉi tiuj punktoj, mi povas trovi ian diferencon ĉe diversaj individuoj, se ili similas al si reciproke en kresko. Tiele la homoj estas verŝajne identigebla per la tuŝento krom trajtoj aŭ fingra stampo.

Tiel same oni ankaŭ povus diri pri la aliseksuloj. Ordinare oni primezuras virinon unue per ŝiaj trajtoj, belaj aŭ malbelaj; sed en la seĝa mondo tio kuŝas ekster la demando. Tie povas ja simple ekzisti korpo, voĉo kaj odoro.

Tre estimata sinjorino, vian afablan indulgon mi petas, ĉar mi devas priskribi tiel nude, kio, ho ve, certe vin naŭzos. Kuraĝe dirite, mi ekspertis tiel la unuan amon flaman al la korpo de unu virino—la unua virino kiu sidis sur mia seĝo. Laŭ la voĉo ŝi estis fremdlanda knabino, ankoraŭ tre juna. Tiam ŝi estis sola en la ĉambro, kien ŝi envenis preskaŭ dante, kaj mallaŭte kantante strangan melodion. Kred-eble al ŝi okazis io tre ĝojiga. Apenaŭ ŝi venis ĝis antaŭ mia seĝo, tuj ŝi batjeto sur min sian karnoplenan,

tamen tre delikatan korpon kaj plie, ial ŝi ekridegas subite, saltas ĉiufanken kiel fiŝoj en reto, gaje batante per la manoj, piedoj.

Preskaŭ por duonhoro ŝi restis sur miaj femuroj, de tempo al tempo kanta, kaj ĉiufoje movante serpente tiun pezan virinan korpon,—ŝajne harmonie kun la ario.

Ja efektive tio ĉi estis la plej granda okazaĵo por mi, tute ne atendita. Mi ĉiam tiel humiligadis antaŭ virino, sankta virino, pli ĝuste terura virino, tiel ke mi neniam povis rekte rigardi en ŝian vizaĝon. Jen vidas, nun mi ĉeestas sola kun nekonata junulino-fremdulino, en sama ĉambro, sur unu sama fotele, kaj plie, mia korpo kon-taktas kun ŝia transe de ledο tiel maldika, ke mi rekte sentas ŝian varmon. Spite de tio, ŝi estas neniom mal-trankvila, donas sur min sian tutan korpon kaj liber-igita for de l' aliaj okuloj ŝi sin dorlotadas en plaĉaj pozoj tute hejme. En la seĝo mi povis fari gestojn forte ŝin ĉirkaŭpremi, kisi tra la ledο ŝian belan rond-forman nukon. Al mi estis permesite, ke mi cetere povu fari kion ajn mi volas.

Depost ĉi tiu mirinda eltrovo, mi jam ne emis al la unua celo, la ŝtelado, nek al projekto alia, ol rekte min fordoni al tiu ĉi stranga vivo sensacia.

Mi memdemandis: ĉu tie ĉi tiu ĉi mondo en la seĝo ne estas la vera loĝejo por mi? En la luma, brilanta mondo, la malbonaspekta kaj malkuraĝa viro kiel mi,

indas nenion krom hontinda, mizera vivo, ĉiam preta humiliĝo. Tamen, transloĝinte en tiun ĉi mondon, se mi nur toleros malvastecon en la seĝo, mi ja senpene povas amikiĝi kun belulinoj, aŭskulti ilin, kaj ankaŭ tuŝi iliajn korpojn, al kiuj en la luma mondo oni ne lasis min eĉ alproksimiĝi, jam ne parolante pri interamikiĝo.

La amo en la seĝo!—tion ĉi certe ne konas tiuj, kiuj ankoraŭ ne spertis la vivadon tie. Nekomprenible estus por tiuj ĉi, kiel magie ebrigan ĉarmon ĝi entenas! Ĝi estas la amo, kiu nur konsistas en palpa, aŭskulta, kaj flara organoj. Ĝi estas la amo de l' mondo de mallumo, kaj neniel de via reala mondo. Ĉu ne estus ja tio ĉi la volupto en la diabla mondo? Videble, oni neniam povus tro ekzakte prezenti al si, kiaj strangaj kaj groteskaj aferoj sin rajtigas en la realecon ĉe káŝataj anguloj en tiu ĉi subluna mondo.

Laŭ la unua programo, komprenible mi intencis tuj forkuri el la hotelo plenuminte mian unuan celon, la ŝteladon; sed tute ravita de la troa ĝojo, mi daŭrigis mian enestadon longe, tiel longe, ke por mi fine la seĝo montriĝis tute kiel konstanta loĝejo, kaj mi jam ne bezonis pensi pri la forkuro.

Kiam ĉiunokte mi eliris la seĝon, mi prenis planan prizorgon por neniom kaŝi sonon, por esti neniel trovita; kaj tial estis nature, ke mi ĉiam povis resti sen danĝero, kvankam eĉ al mi ofte ŝajnis mirinde, ke oni

ne rimarkis min tiom longe—en la daŭro de kelkaj monatoj.

Preskaŭ dum la tuta tago mi enestadis en la seĝo, kun kurbigitaj kubutoj kaj fleksitaj genuoj. Mia tuta korpo pro tio kvazaŭ fariĝis paralizita, tiel ke al mi fariĝis neeble rekte stari, kaj fine kiel kriplulo mi devis rampi sur la manoj survoje al la kuirejo, aŭ al la tualetejo. Kia frenezulo mi estis, ke mi ne povis foriri el la mis-tera mondo de palpa sento, malgraŭ tia korpa suferado!

Dume, interaliaj sin trovis tiuj, kiuj loĝis monaton post monato en la hotelo, kiel en sia propra domo,—ĉar ĝi estis hotelo, ĉiam varianta estis la listo de gastoj. Sekve, iom post iom, mi devis lasi la amatinojn en mia stranga amo cedadi siajn lokojn al aliaj; kaj la multaj amatinoj, miaj mistereaj, ĉiuj postlasis sur mia koro siajn apartajn impresojn, ne per la trajtoj ĉe ordinaraj okazoj, sed ĉefe per la formo de l' korpo.

Iu el ili estis tiel energia kiel ĉevalido, havante bele streĉitan korpon; kaj alia koketa kiel serpento, posedis korpon facile moveblan. Unu estis dika kiel gumpilko, riĉa je elasteco kaj graso; kaj dua tiel fortika kiel greka skulptaĵo, kiu paradis muskolojn plene disvolvigintajn. Kaj tiel mi trovis en la korpoj de ĉiuj virinoj, respektivan amindecon kaj karakterizon.

Dum mi tiel transiradis de virino al virino, mi ankaŭ spertis aliajn kuriozajn okazaĵojn, jen, unu el ili: Foje la ambasado de iu eŭropa potenco, okaze metis

會 員 の 聲

★本誌へ科學欄を設けて頂きたい。文學も勿論結構だが科學に關する興味深い文章で科學上の terminoj を覚えておけば論文作製に資する所少くなかろうと思ひます。(細田文雄) 委員より——各方面の先生方に専門上の事で一般に興味の深いものの寄稿をお願いしてゐるのですが仲々いたゞけません。大いに努力中です。その中實現しませう。

★ Altestimataj Fraŭinoj-Esperantistinoj! Lastatempe en tiu ĉi rubriko aperis unu malferma letero pri edziĝo de geesperantistoj. En tiu alvoko la subskribintoj diris: kiam fraŭlino-esperantistino edziniĝas kun ne-esperantista sinjoro, ŝi plej ofte ĉesas en sia studado de Esp. t. e. la edziniĝo de unu fraŭlino-esperantistino kun ne-esperantista edzo signifas perdon de unu esperantistino kaj tial la subskribintoj klopodas instigi fraŭlinojn por ke ili edziniĝu kun sinjoroj-esperantistoj. Tutkore ni devas danki la subskribintojn pro ilia kuraĝa alvoko kaj penado (kaj perado). Sed mi ĉi tie volas esprimi mian propran opinion. Fraŭlinoj-Esperantistinoj! Vi devas esti batalantinoj! Eĉ se vi edziniĝos kun ne-verda sinjoro, vi devas esti fortaj kaj fervoraj kaj nepre devas fari vian edzon esperantisto. O! batalu, estimataj fraŭlinoj! Se vi venkos kaj povos fari vian karan fervora esperantisto, la nombro de esperantistoj pli multiĝos kaj tiamaniere vi povos partopreni por eterne la verdan movadon kun via kara edzo. Estimataj fraŭlinoj! vi edziniĝu kun bona sinjoro kaj verdigu lin kaj verdigu tutan familion.

Al Estimataj Sinjoroj Perantoj.

Mi estas fraŭlo kaj tre fervora esperantisto. Mi petas vin ke vi por ke mi povu edziĝi kun ĝentila, ruĝajn vangojn havanta kaj, se mi povus deziri plie, tre bela fraŭlino. Mi ne demandas, ĉu ŝi estas esperantistino aŭ ne. Se ŝi ne estos esp-ino, mi nepre devigos ŝin verdulino. Kaj tiamaniere mi povos batali por nia afero per duoble plifortigita forto.

Kun alta respekto. Sincere Via.

Unu fraŭlo en Atami.

[匿名でしたが特に掲載しました。——本欄

係] [G. M. kaj J. O.] より御答へ——大變結構なお考へです大いにおやり下さい。成程理論的にみて fraŭloj-esperantistoj が ne-esperantistoj-fraŭlinoj と結婚し fraŭlinoj-esp-istoj が ne-esperantistoj fraŭloj と結婚しどちらも Esp. を家庭に入れる事になれば立ち所に二倍の同志がふえますが仲々こう理論的にうまくゆきません。我々は消極的の立場になつてこれ迄十數年もの間の経験にもとづいて折角 fervora な fraŭlinoj esperantistinoj が edziniĝo の後 verda mondo を去られたことの多いのを見てかゝる事の今後少なからんことを冀ふ意味であの一文を草したのです。——あの alvoko に對して方々で反響のあつた事を感謝します。あれを一二の人に對するあてつけで書いたと考へて怒つてをられる人があるさか聞きましたがそう誤解されては迷惑至極です★四月號本欄の神山氏の意見は私の考へてゐた事を其儘書かれて居る様な氣がしました。しかし、委員の御説明を讀んで成程それもまづいかと思ひました。そこで私は次の新案をproponi します。曰く「贊助會員の會費を年額3圓に下げる事」です。贊助會費五圓は一寸出しにくいが3圓なら出す人がかなりあるかと思ひます。云々。(神奈川縣下生)

◆委員より——別項記載の如く3日31日の學會役員懇談會で F 氏の御提案と同様の提案が三石氏より申出され、いろいろ研究の末贊助會員はやはり五圓とし外に年額三圓の正會員(正維持員)といふものを新しくつくつて雜誌のみの購讀を主とする人は2.40錢の普通會員のまゝでよく眞に學會を支持してやらうといふ方々は早速正會員(年額3圓)になつていたゞく様にしたいと思ひます。正會員がふえる事は我がエス界のためよろこばしいことです。御知合の方を觀誘してドシドシ正會員になつていたゞく様にして下さい。

★ Mi estas korea esperantisto. Mi komencis lerni Esp. antaŭ 1 jaro, sed mi ankoraŭ ne povas flue paroli. Neniam mi havis eĉ unu esperantistan amikon. Kaj ĉar la progreso de izolita memlernanto estas ne tiel rapida, mi multe ĉagreniĝis pri tio. Sed nun mi estas ano de J. E. I. Jam mia koro estis kontenta, havante multe da amikoj pere de tiu ĉi revuo. De nun mi klopodos propagandi Esp Bonvolu helpi al mi! Mi ankaŭ deziras korrespondi kun samideano. (朝鮮平北定川郡葛山面光東洞一金起成)

★輸入卸は
★今後も致します

本月限り

エスペラント洋書小賣部
を閉鎖いたします

★品切にならぬ内
★至急御注文下さい

特價

| | |
|--|------|
| ★Sankta Biblio (一千頁新舊約聖書完譯) | 3.60 |
| De Apeninoj ĝis Andoj (イタリア物語) | 0.30 |
| For la neŭtralismon! (SAT社發行) | 0.30 |
| Aventuroj de la kalifo harun alraŝid. | 0.30 |
| Deveno de Esperanto (ザメンホフ氏) | 0.30 |
| Eksperimento de Eccles. | 0.30 |
| ★Historio de la lingvo Esperanto. 第二卷 | 3.00 |
| Elektitaj poemoj de Peŝöfi (ハンガリー詩集) | 0.40 |
| Kurludo de Toroj (パリー市發行) | 0.40 |
| Johano la Brava (ハンガリー詩集) | 0.45 |
| Esperanto in 12 lessons (文法付) | 0.50 |
| Alegorioj el la naturo. | 0.55 |
| Pri la devoj de l' homoj (イタリー市發行) | 0.60 |
| Gvidlibro tra Trentino (ウイン寫眞入) | 0.65 |
| ★Internacia mondliteraturo. 下記何れも一部金八十五錢 | |
| Barbaraj prozaĵoj, Servokapabla marcus tyboul, El la Camera Obscura, | |
| Ano de l' ringludo, Nigra galero, Hermano kaj Doroteo (ゲーテ). | |
| ★Aŭstralio (ヒルト社新版濠洲寫眞案内, 頗る美本) | 3.20 |
| Maŝinfaka esperanto-vortaro (E. Wüster 著) | 1.00 |
| Esperanto Handwörterbuch (エス獨) (ベンネマン氏) | 1.75 |
| Tragedio de l' homo (ハンガリー市出版美寫眞入) | 2.20 |
| Esperanto grammar & commentary (Cox) | 2.30 |
| Complete grammar of Esperanto (335 頁完本) | 4.00 |
| ★Enciklopedia vortaro (エス獨) (第一卷) | 7.00 |

★以下一部三十錢

★以下一部八十五錢

★以下一部一圓

Rakontoj (チエホフ著)

Revizoro

Portreto (ゴッセル)

Bukedeto (物語)

Rabistoj

Vendetta (バルザック)

Mia amiko

Makbeto

Himnaro Esperanta

Antaŭdiro (喜劇)

Legendoj

Esperanto (エス露語獨習)

Du rakontoj

Aspazio

Deklaracio (有島氏)

★樂譜 Esperanto march 甲 ¥2.00 乙 ¥1.50

畫像 Dro Zamenhof, 8寸×11寸 アート紙獨逸輸入 一枚に付二十五錢

徽章 Lingvo Internacia Esperanto 金字入カウスボタン一組に付一圓

Esperanto 金字入旗型針付四十錢 星型カウスボタン一組に付一圓

煙草入 ¥1.50 マッチ夾 ¥0.50 共に白輕銀製ニ Vivu Esperanto 字入

御注文は全部代金引換で發送

★書名宛名番地御明記下さい★

★前金御無用です★

洋書部

旭光社

東京市芝區濱松町三丁目壹番地

日本エスペラント學會編纂

中西義雄氏點譯

上田順三氏印刷

四六倍大二百頁

定價一圓

厚紙印刷

送料十六錢

點字書 エスペラント文法と小辭典

盲人エスペランチスト間に點譯のエス語獨習書兼小辭典として手頃で廉價なものが要求されてゐたが全く營利的にみてなりたないものでそのまゝになつてゐたが一昨年學會出版部と中西氏と交渉の上營利を度外視して之が作成頒布を企劃し學會編輯部にて編纂の上中西氏へ送り同氏は多忙の身にも拘らず常に佛教濟世軍の盲人部の指導にあたつてをられる經驗上本書の出現の必要を痛感され銳意その點譯に努力され上田順三氏亦この點譯によつて原版製作に従事され一年有半の勞苦の後去る四月上旬印刷出來しこゝに一般に發賣し得る運びに立ちいたしました。どうかお知り合ひの盲人の方々へエス語宣傳をなさると共に本書を御すゝめ下さい。

本書の文法の部は「新撰エス和辭典」の附録たる「エス語語法概觀」を以て之にあてたもの故エス語獨習書として役立つべく字書の部は同辭典中より日常必要な語彙數千語を擇び簡單な譯語を附したるもの故平易な讀み物の繙讀には極めて手頃な好伴侶である。

前月號廣告の取次圖書中 MARTA 及 FABELLOJ DE ANDERSEN (II-a

Parto) は品切 SANKTA BIBLIO (價三圓 送料十八錢) はまだありあす

講習會の用書種々

★★★ 初等講習會には ★★★

エスペラント讀本

井上萬壽藏氏著・四六版 52 頁・挿畫數拾個入・定價 30 錢・
送料 2 錢

外國語の素養の少ない人々をおしへるにはこの讀本が最も適當です。ことに挿畫を以て説明してあるので少年少女に教へることもできます。今度第三版發行と共にすつかり誤植を訂正致しました。御利用下さい。

ラヂオ・エスペラントテキスト

日本エス學會編纂・菊判 38 頁・印刷美麗・定價 20 錢・
送料 2 錢

ラヂオ講座用として作られたものですが多數の人の熱望にそひ一般講習會の用書として發賣致します。第一課より第十課に互り文法を一通り配列し各課に練習題を入れた上第五課以下には一口噺・童話・手紙・寓話・詩・小説の拔萃よりなる讀み物を配置して興味の中に文法に習熟する様編纂してあります。

エスペラント講習用書

小坂狷二氏著・四六版 64 頁・改正定價 35 錢・送料 4 錢

中等學校卒業程度の人々に講習する際に本書を使用すれば最も短時日に最も高程度の學力を與へることができます。殊に本書は「エスペラント捷徑」と全く同一の材料を配置したもの故「捷徑」で勉強した人々の後習用書としても好適。

★★★ 中等講習には ★★★

エスペラント中等讀本

小坂・大井・岡本三氏共著・新四六判 64 頁・定價 30 錢・
送料 2 錢

興味本位の讀み物數十篇を易より難に分つて配列したもので中等講習用書として好適。御利用を。

同書正誤：—第 9 頁、—5 行 mia は sia の誤。第 38 頁、—7 行の al mi の次へ ŝojnas, ke malmultaj homoj ĉe la aliaj nacioj povis を脱落。第 41 頁、2 行 lia は sia の誤。同頁、4 行 en tagmezo の次へ montris al mi を脱落。

以上の誤植は改版の際全部訂正します。悪しからず。

東京市牛込區新小川町 3 の 14 (振替口座東京 11325 番)

財団法人

日本エスペラント學會

| | | |
|---------------|------------------------------------|-----------------------|
| エスペラント捷徑 | 最新最良の獨習書一冊を讀破すれば立派な學力をえられる | 定價
1.00
送料
6 |
| エスペラント初等講座 | 外國語を全然知らぬ人に一通り文法を平易に説明した良獨習書 | 0.20
2) |
| 新撰エス和解典 | 語數一萬五千餘譯語正確・索出至便・新語豐富 | 0.75
2) |
| エスペラント講習用書 | 文法教科書と讀本とをかねたる講習用の良書 | 0.35
4) |
| エスペラント讀本 | 挿畫入初等用讀本で程度低く小中學生にも好適 | 0.30
2) |
| エスペラント中等讀本 | 興味深き讀み物數十篇を収む | 0.30
2) |
| エスペラント發音研究 | エス語發音上の疑問を氷解す | 0.30
2) |
| エスペラントやさしい讀み物 | 笑話22篇を對譯詳註し興味横溢 | 0.10
2) |
| マテオ・フアルコネ | (對譯詳註) 叢書第一篇 「カルメン」の作者メリメの名篇を對譯詳註す | 0.35
2) |
| 骸骨の舞跳 | (秋田雨雀氏戯曲) 三篇のエス譯 | 0.40
2) |
| 倫敦塔 | (夏目漱石原作) エス譯 | 0.15
2) |

無代進呈 { ★エスペラント宣傳の【葉】(講習會頒布用) 百枚以下無料(但送料卅枚毎に4錢) 百枚以上百枚毎に實費送料共65錢にて
★エスペラント宣傳の【チラシビラ】(街上展覽會等で配布すべきもの) 三百枚以下無料(但送料百枚毎に2錢) 三百枚以上は百枚毎實費送料共10錢

★日本風景風俗エハガキ (四枚一組三色刷價廿錢送料二錢)(エス文説明付)

★綠星章 { 甲種(安全ピン止) 乙種(背廣用) 各一個の價送料共三十錢
丙種(安全ピン止特製) 丁種(背廣用特製) 各一個五十錢送料六錢
カフスポタン 一揃 (箱入) 一圓二十錢送料六錢

★綠星旗 [紙] (十枚送料) 半紙大原紙兩面綠色刷左角四分の一は白地に綠の星、
[製] (共十五錢) 殘四分三は綠の地にエスペラントと白く抜きたるもの

KORESPONDA FAKO

★ Rusujo :—Odessa Foto-Societo ; Ul. Halturina, 11. poŝtkesto N-ro 1125, Odessa, U. S. S. R., 寫眞愛好家と政治經濟運動地理各般の寫眞の交換を希望。

★ Aŭstrujo :—S-ro Francisko Sommerhuber, en Kemsminster ; deleg. de UEA., 日本産草花の種子を貰ひたし又名所繪葉書の交換をしたし。

★ Italujo :—S-ro Stefano La Colla (L. K.), Via Paolo Amato, 2 Polermo. 日本の宗教史及其に類した事につき budhistoj と文通希望

★ Japanujo :—S-ro Masaki Okabe, ĉe S-ro Ogaŭa, N ro 16, Haramaĉi, Koiŝikaŭa, Tokio. kĉl. IP aŭ L. nepre resp.

★ Japanujo :—S-ro Hisao Shimizu, 874, Misakidoori, Kuwanamachi Mie-ken ; PM. IP. L.

★ Japanujo :—S-ro Masuda-Takeo, Usimaru-tyoo 49, Kita-ku, Osaka ; dez. koresp. kun alilandanoj IP. L.

★ Japanujo :—S-ro Tacuo Uemura, Niŝi-imaoroŝi 19, Otsu-si, Siga-ken ; dez. kun alilandajfraŭlinoj. IP.

★ Japanujo :—S-ro Ĵuniĉi Minami, Hōtōji, Hukakusa-maĉi apud Kioto. IP.

★ Japanujo :—S-ro Ŝigeiĉi Macumoto, P. O. Sakaŝita, Aiĉi-ken (instruisto) ; L. PM. interŝ. desegnaĵojn de geknaboj.

★ Japanujo :—S-ro Ŝigemiĉi Cuĵi c/o S-ro Sadakacu Iĉikaŭa, Hommaĉi 4-ĉome, Kooĉi (urbo) ; IP. PM. L. kĉl.

★ Japanujo :—S-ro G. Ota, ĉe Fukada Gomei Kaisha, Okazaki-ŝi, Aiĉi-ken ; PM. L. pri kotonteksaĵoj precipe kun Sudazianoj.

★ Rusujo :—S-ro Hosejn-Aga, Hosejnov (バハイ教徒) Aŝkahad-Turkmenio Strato Krimskaja N. 41. 日本人と文通希望

★ Germanujo :—S-ro Fritz. Kramer, Hunzenan 7sa Altenburger Strato 93. 日本人と

★ Italujo :—F-ino Sabina Giordan, (ピアノ教師), Vialle Friuli 13 Udine ; 日本人と

★ Blankrusujo :—S-ro K. N. Bjelor, Mogilor, Uljano-krupskaja Str. N-ro 29.

★ Germanujo :—S-ro Erich Bracholdt, Schlossstrasse 2, Riesa, 日本人と IP. L.

★ Germanujo :—S-ro Rudolf Hannes, Lommatzscherstrasse, Riesa ; 日本人と IP. L.

版八十第訂改

ある西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたもので、得て知にエスベラントに熟達した人も他書に見出しが書留送料十九銭」

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せる中にエスベラントのみ幾多の熱心者が崇高なるエスベラント主義、即ち人類の義に感激し、人類主義の義務である。本書二〇〇頁、書を讀むは料十三銭」

模範エスベラント獨習

秋田雨雀・小坂狷二共著

◎國字問題解決の先驅◎
月刊
雜誌
ローマ字世界

定一部二十錢
價一年前金貳圓

◎日本の國字なるべき名譽と運命をもつた日本式綴方によるローマ字の雜誌！
◎標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したローマ字の雜誌を御覽なさい！
◎ローマ字の日本式綴方の論據、要點等に就ては郵券二錢を御送り下されば『ローマ字のすすめ』といふ小冊子を差上げます。

財團法人 日本ローマ字社

振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

東京市神樂町二丁目 叢文閣 振替口座 東京 九八八二四

我國におけるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財団法人日本エスペラント學會

【東京市牛込區新小川町三の十四】 【振替口座東京 11325 番】

◆すべての運動は大衆の協力に俟たねばならぬ。今やエスペラント普及運動は最も多衆の協力を必要とする時だ。各地同志の大同團結が必要だ。個々人の叫びは個々人の叫びにすぎない。大衆の叫びは輿論の喚起だ。組織だつた協力こそ眞の力だ。

◆エスペラントを愛するものは誰しも御入會下さい。（會員は法規上維持員とよぶ）

- 目 的** エスペラントの普及・研究・實用
- 事 業** (a) エスペラントに関する各種の研究調査及其發表
(b) 雜誌及圖書の刊行等
(c) 講演會、講習會の開催及後援
(d) 其他本會の目的を達成するに必要な認むる事業
- 會 費** (a) 普通會員 年額2圓40錢 (b) 贊助會員 年額5圓
(c) 特別會員 年額10圓以上 (d) 終身會員 一時金100圓
- 入會手續** 住所、職業、姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい。
振替送金最も安全)
- 會 員 の 典 特** 1. 毎月研究雜誌“La Revuo Orienta”の配布をうく
2. 出版圖書の割引をうくることあり
3. 語學上の質疑其他一般の問合の返事をうく
4. 宣傳の「榮」その他宣傳材料を無料でうくることを得

詳しいことは直接御問合せ下さい

役員名簿 (五十音順)

| | | | | |
|-----|----------|--------|------------|---------|
| 理事長 | 理 學 博 士 | 中村 精 男 | 理 事 | 美野田 琢磨 |
| 理 事 | | 上野 孝 男 | 慶大教授醫學博士 | 望月 周三郎 |
| 同 理 | 元鐵道省運輸局長 | 種田 虎 雄 | 東京朝日新聞顧問 | 柳 田 國 男 |
| 同 理 | 東京女子大學教授 | 河崎 な つ | 鐵道省技師 | 小坂 狷 二 |
| 同 理 | 中央大學教授 | 川原次吉郎 | | 大井 學 |
| 同 理 | | 何 盛 三 | | 三石 五 六 |
| 同 理 | 帝大教授文學博士 | 黑板 勝 美 | 高層氣象臺長 | 大石和三郎 |
| 同 理 | 政治教育會會長 | 小林鐵太郎 | 神奈川縣立農業學校長 | 清水勝雄 |
| 同 理 | 政修大學教授 | | | 木崎 宏 |
| 同 理 | 帝大名譽教授 | 高楠順次郎 | 帝大教授 | 穂積 重 遠 |
| 同 理 | 文 學 博 士 | 土岐 善 磨 | 帝法學博士 | 三島 章 道 |
| 同 理 | 東京朝日調查部長 | 西 成 用 | 子 | |
| 同 理 | 帝大教授醫學博士 | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|------------------|------------------------|-----------------|---|-----------------------|----------------------------------|-----------------------|-------------------------|--|---|---|--|--|
| (郵税共)
本誌購読料 | | | 口座番號
本會振替 | | 廣 告 料 | | | | | 發行所
財團 日本エスベラント學會
東京市牛込區新小川町三ノ十四
電話九段(三三)二四一八番 | | |
| 一部
半年分
一年分 | 錢 24
圓 140
錢 260 | 學會々員には無代
頒布す | 基本金専用東京三〇八九番
一般長野三二八三番
會計用東京一二三三番 | 1回
全頁
半頁
四半頁 | 3回
25
72
13
37
19 | 6回
140
74
38 | 12回
250
130
70 | ◆金銭に關係なき廣告四割引
◆表紙第三頁は二割増の事
◆表紙第二頁第四頁はお断り
◆特別會員の廣告は二割引 | 印刷所
株式會社一匡印刷所
東京市神田區西小川町二ノ五
印刷人
高見澤保芳
發行人
大井學
編輯兼
東京市牛込區新小川町三ノ十四
昭和三年五月一日發行
昭和三年四月十五日印刷 | | | |